雜記 丙辰 人名類

一

H 20
523

諸侯
津輕
南部
阿部
大田原

洋學發端

儒家
林
向井
中西
細井
南宮
泉
紫野

岡本
塙

東京國學院圖書

B 23475
000432852 2

書畫
近衛
澤田
市河
生方
橘
岸本
前田

谷
游龍
大田
山崎
北
成嶋
宝田
壽阿
其阿
豊香
以孝子

津輕氏

大名の生活

世人以爲へらく。初め津輕家は南部家の臣たりしに後四万八千石より十万石に進み、大廣間大名に列し、寧親ハ南部侯の右に坐す。南部の浪士相馬大作津輕侯を殺すこと三代に及びぬと。内藤恥叟の徳川十五代史は藩翰譜に依りて、津輕家初め南部の被官たりきと書す。外崎覺曰く。津輕家は南部家の臣に非ずして、南部却て津輕の地を奪ひしなりと。内藤辯ずること能はず。津輕家の四万八千石より十万石になりしは、越中守寧親即ち上仙院の時なり。寧親明和二年に生る。本姓

鷗外藏書

は明和元年に生れ、一歳の長あるを以て、寧親之に
親むこと友の如くなりき。
寧親は寛政三年二十七歳にて家督し、越中守となる。
文化二年四十一歳にて七万石に進む。これを御乗出し
と云ふ。五年又四十四歳にて十万石に進む。次いで
文政五年五十八歳にて大広間大名となり、従四位侍
従となる。南部侯の従四位下となりしは其後なり。
津軽家と南部家とは参観の時相反す。某年
偶々同時に両侯江戸にありて登城し、津軽侯右に
坐す。然れども何事なかりき。
寧親文政八年六十一歳にて致仕し、天保四年六十

九歳にて歿す。本皓は信に先だつこと四旬、天保八
允成
後るゝ
年七十四歳にて歿す。
次に寛広院信順寛政十二年の生なるが文政八年
二十六歳にて家督す。稍驕りて水野出羽守に請
託して揚輿に乗る。水野の勢を失ふや、此事物
議を惹起す。外舅田安大納言信順に勧めて致仕せ
しめ、事なきことを得つ。天保十年信順四十歳
の時なり。信順は万延元年信順六十一歳の時剃髪
となる。文久二年信順六十三歳にて病歿す。保六歳
にして信順の柩に侍したりき。
次は順承と云ふ。四十歳にして小津軽より養子に来

ぬ。彦ら父と同年なりき。安政六年六十歳にて致仕し維新比死す。相馬大作の死後なり。

次の承昭は斉護の子なり。細川越中守の五男なり。安政四年十七歳にして津軽家に入り、六年家督し、現存す。以上三代一人として相馬の毒手に陥りしことなし。

五百十一二歳にして本丸に仕ふ。姉小路様の部屋子となる。

其頃本丸に鬼出づと噂す。女小姓長廊下を歩みて室を閉ぢに往くに、鬼出で、礫を打附け、灰を撒き掛くとなり。五百代りて往けば、果して灰を撒き掛くるものあり。五百鬼を打たんとす。鬼許せと叫ぶ。若君竹之助様なりき。鬼面を被りゐたりき。竹之助後作州津山松平越後守となる。

五百本丸より下り、桂菴やうの人に頼みて大名に仕へんとし、二十餘家に御目見に往きぬ。されど五百の心に愜はず。土佐山内家に仕ふることとなる。同見には考試あり。手迹、和歌、音楽なり。試官は老女なり。文房具を出し、これに一つお染めと云つて、色紙を與ふ。五百自詠を書す。次に常盤津一曲を奏す。山内家二十四万石なるに、女中綿服なると、五

喜ぶ。老女みと五百が土佐柏の紋附けたるを見て、
当家と同じ紋なるは何故ぞと云ふ。五百の祖先は
山内一豊の弟より出づ。此人家を出でゝ江戸に鉄
問屋を開きぬ。江州日野の産なるを以て日野屋
号と称しき。されど山内氏にして、名告にも豊の字
ありき。老女聞きて云ふ。さはめでたき事なれば、
追ては申上ぐべし。それまでは紋を遠慮せよと。
五百父に告ぐ。父聴かず。曰く。祖先伝来の紋章
は改むべからずと。
五百転じて藤堂和泉守邸に目見えす。模様附に
て、奥方祐筆を兼ぬることとなる。時に年十五。

此邸にては女小姓を常とするに、特に抜擢せられし
なり。十六歳の元旦に中老職に進む。中老は幕府
奥にては側室なれども、大名の家にては侍女の上席な
りき。中老職は二十四五歳ならでは勤めぬ例なりき。
藤堂侯は通鑑を上梓して自ら序せし人なり。当時清
元を好み、延寿太夫と交して曲を作らしめ、家臣に
清元に縁あるものを用ゐき。
五百は藤堂家にて揃頭と呼ばる。武芸あるゆゑ
男之介の綽名ありき。
諸家の中老は年三十両なるに、藤堂家は九両にて、
食事も其自弁なりき。さるを三間位の部屋に

ある、女中二人仕ふ。侍女等に給仕することあり。
年に四百両を費す。
此費は君侯来て、「何か雨らせい」と云ひ、酒肴を出さしむ。
大名も夫人も侍女に酒を飲ましむる習あり。袂に濡らぬ袋を入れ、酒の入物とするによる。
五百の母は松平摂津守の侍女なりしに、西近つ合へと命ぜられ、宮殿にて出で、食ひ、二回向座めと云へり。
藤堂家には年始に踊りあり。緋縮緬の割褌と襷とにてなるときは、裸体に其褌を着け一踊することあり。踊り女なぞ下りし侍女もあり。
藤堂夫或時他家より帰りて、五百に珍らしき品を賜はせられたりと云ふ。何ぞと問へば白き鰈と云ふ。
藤堂家にては鰈の黒き方を上にしてよろしきなり。
五百が藤堂に出たりし時は水野の縁約を勧めし時なり。御櫃役と云ふことあり。役人民家に入りて飯櫃を検し、米なるときは罰す。大名は侍女も米を食ふことを得ず。五百の家より老婢通ひ来て米を食んで泣きしことあり。
五百藤堂家にあること十年にして君侯夫妻伊勢参の供に出るを免れ行くことなる。出發前父大病

なりとて呼び出さる。こは父が許りて下がらせしなり。間もなく品江に嫁す。

広重家の奥に丑待と云ふことあり。広き間の中央に鏡台を据ゑ、周囲の襖をはづし、灯を消し、行燈の一本灯心に火をともし、鏡に對して丑の刻まで待つことなり。鏡に未来の夫現ると云ふ。或侍女には狐を祀りたる人形見えき。此女は何屋何櫓之助の妻になりぬ。広重家由縁土産物を調へて広重家に来りしに門より返されぬ。

五百の父は文晁、写山と交る。写の継の酒を買ひしに銭なかりしかば父に借りにおこせし也。

あり。文晁谷川の好様より金を借りにおこせしことあり。父云く。画をかきておこせ。價を出すらむと。文晁画をかきて金を受取りぬる。當時町人は幕府の用金に當てられき。肥前書所として日比谷出雲町に於てたる百十両の受取あり。こは松岸肥前守の番所なり。町人は金を埋めて其所を知れんとせしものあり。

津軽氏一系

○秀郷…基衡─秀衡

秀栄（津軽氏）─秀元─秀直

頼秀─秀季─秀之─秀信（南部ヨリ後見ス）─秀則

盛信─元信（南部ヘ人質ニ）─光信（口上ヘ津軽ニ帰ル）─政信（堀下次 葉ニ）

○政信 近衛前関白尚通子 ―守信

○津軽右京太夫為信 ―備中守信枚（文） 慶長六年叙爵

―土佐守信義 寛永八年正月十四日卒

―備中守信政 平蔵、 明暦二年二月三日卒、 渋江辰盛来仕、

―土佐守信寿（ヒサ） 宝永七年十二月十九日卒 渋江辰盛仕之

出羽守信著（アキ） 享保十六年五月十六日卒 渋江輔之仕之、為侍医仕之。

―備中守信寧（ヤス） 延享元年八月六日卒 渋江本皓仕之、

―土佐守信明（ハル） 天明四年二月三十日卒 渋江允成仕之。

播中守寧親 出羽 和三卯、寛政三年八月二十六日卒、 — 大隅守信順 ハゴ寺 文政
文化元年五月廿三日七百石、
御江元服信之、
宮田安存匡女 釼姫
後金姫
八年四月十日卒 — 順承 — 承昭

南部氏系

南部氏

盛岡
南部政行 — 守行 — 義政 — 政盛

信時 — 信義 — 政康 — 安信 出羽守　時 候

高信 — 信直 — 利直 — 重直
重信
行信

信恩 — 利幹 — 利視 — 利雄 宝暦二年五月卒

利謹 — 利正 安永九年二月卒

信敬 — 信依 — 信房 天明元年卒
昭和二年五月二十九日卒

信真 寛政八年自卯 ─ □利敬 文政三年自卯 ─ 利用 ─

利済 ─ 信侯 ─ 謹敬

重直 ─ 直房 ─ 直政

○通信 ─ 廣信 ─ 信興 寛保元年十二月卯 ─ 信依 ─ 信房 ─ 信真

信順

利幹 ─ 利謹 ─ 利正 ─ 利敬□

（八ノ）
重信 ─ 10行信 ─ 信庸 ─ 信傳 ─ 信喜 ─ 信鄉 ─ 信誉

伊予守正右 阿部 寛延元年十二月卯

○阿部

伊勢守正倫 明和七年九月卯 文化二年

備中守正精 寛政三家督 （松平左京大夫頼前母）

伊予守正寧 文政九家督

伊勢守正弘 天保七年十二月

備後国福山 十万石

阿部氏

夕柳

ゆく人にも〻さしてかざゝん青柳の糸にまよへる

来る人も有やと　正寧

寄道祝

まつりことの道ゆたかなる此君になびく

人もすなほなるこゝろ哉　正弘

雪中若菜

あし田鶴のあさるはま辺の雪消を跡とめ

てや根芹摘らむ

右清心院謚子
伯夷叔齊
河山之にかゆる蕨をとりくにかれはてたる人をかなし紀　忠貫
右匠桓
秋梢行
紅葉ちる里のわらはをともなひて梢の
石守ゆきるゝゝれ
右壽子
以上短冊伊澤徳所蔵

大田原氏系

大田原氏

○大田原山城守繩清 下野那須人 丹治氏

○備前守晴清 下野大田原城主 一万二千四百石

佐兵衛郎 寛永八年歿、年六十五

山城守高晴清、主膳、寛文五年十月十三日歿、弟為清分封千石、

― 備前守政清 寛永八年十二月廿五日歿

実ハ織田政勝子、正室 五年九月二十五日歿

― 和泉守純清 元禄七年八月十九日歿

― 備前守典清 一作豊清、

守清信 実ハ吉清子印藤、元禄十二年七月十九日歿

― 為之丞扶清 飛騨守 寛享元禄十六年十二月廿五日歿

― 備前

[redacted]
出雲守友清 近江守 寛永二年七月廿九日歿

― 飛騨守庸清 ― 山城守光清

享和二年卒 ― 鉦次郎當房 文化九年卒 ― 出雲守慶清 弘化四年三月卒

出雲守 政經 ― 隼人政増 ―― 清勝

元禄、宝永、正徳、享保、元文、寛保、延享、寛延、宝暦、明和、安永

洋学発端 其一

嘉永六年

六月三日 米艦浦賀ニ来ル、

安政元寅

正月十六日 米艦再ヒ浦賀ニ来ル、

小具足ノ宝器アリ、

三月 米艦去ル、

五月 露艦来泊、 九日 下田取締下田奉行ノ命アリ

六月 米艦下田ヨリ去ル

安政三年

正月 築地小田原町北側下屋敷ニ講武所ヲ立テラル、

三年三月以、四月創業、後ニ移ス小川町、

三月二日 勅許以諸国寺院之梵鐘、鋳造大砲小銃書ス、

十月二日 外国人ヲ使ニ西洋銃陣ヲ行シメ、

八月十五日（廿一日）〔軍〕行列シ〔テ〕観ル、

十月二日 徳川昭〔斉〕地震、幕府東湖十 乃〔名〕以下死去。

全体ノ（〔名〕三十五両） 救小屋

其二

安政三年二月 飯田町九段坂下竹本主水正屋敷ニ 蕃書調所（十段、文久三開成所、小川町下谷所、）、箕作阮甫（安政六年三十八年）、杉田成卿（安政廿二年）洋書調所

安政五年七月三日 石塚静海、伊東玄朴 〔奥医師〕、（安政三十八年）志賀〔天〕〔居〕、戸塚〔静〕〔海〕代山、奥医師二百俵三人扶

言以松本良甫、竹内玄同（〔石〕〔川〕〔養〕〔安〕）、伊東〔貫〕斎 奥医師

有彬（ナリヨシ）

尚正（ナリマサ）

勝道（カツミチ）

林家

○羅山 名忠、信勝 子敏

鵞峰 春斎、春勝 文穆

守勝

鳳岡 信篤 正献

快堂 信充 正懿

信智

鳳谷 信言 貞

竜潭 信愛 孝恪

鳳潭 信徴 正良

錦峯 信敬 簡順

述斎 衡 快烈

十四子梧南 旬 二拾家

檉宇 煌 貞良

壮軒 健 昭甫

復斎 韑 文毅

藤潭

學斎 昇 文鍇

格四郎

又三郎

牛込区弁天町 林暐

○讀耕齋 守勝 貞毅 — 春東 勝澄 晉軒 — 葛廬 信如 温謙

萬(?)賓 信亮 荷莊(?) — 觀山 信充(?) 良順 — 琴山 信隆(?) 端帖(?)

[illegible] — 靈(?)賓 晃 文駿(?) — 曄 築地病院長

○確軒 信智 靖厚 — 桃賓(?) 信有 紹之(?) — 東谷 信彰 賢頌(?)

信宝

林學齋、新宮涼庭

本〻は有人集たるものゝ「學齋」の款ある軸なりき、順正書院過訪の詩を録せるものゝありしが、學齋とは林祭酒云ふの趣軸ニ記さるゝによりて調べ得やさずれ、順正書院とても離の事業たるか今に存しやをみり(?)其之て

涼庭所立學校

(慶田の書目ニ新宮涼庭の書きし順正書院記一冊見えたれば醫家かとも思ひ居て)清當(?)用の書物(?)現ん(?)てつ其ちの「學齋」たり「順正書院」たり何れもさ(?)しゝ(?)氣半(?)はきこえ重みて此折(?)ゑんなかや、ゝ(?)しゝ氣事(?)はき

あらためて御すみ候はゞ当方にて御調べの候也
委細は詳しく書て
右は紀州の草を宮用に任じまして
御承知申上候
子年十月 日
加山保維吉
森先生
侍史

向井靈蘭

残念乍ら詳しく不明であるが、東京日本橋の大改
築の前は伊賀の靈蘭軒とて売薬商の看板で有名であつた
その五十二年中に向井元升は靈蘭の名前であると
又元升は此元成の後であると記述あり候件
がら御調べ下さいまし三月号に向井家系図を（中三月号）
掲する一文を寄せられ度、これは掲載候へは、

向井氏男系

向井元升（初代）
├ 元端（二代）
├ 去来
└ 元成（兼丸）（三代）
　└ 兼命（四代）
　　└ 兼般（五代）
　　　└ 兼美（六代）
　　　　└ 大貴（七代）

年　月　日

萬哲（八代）―萬通（九代）―萬雄（十代）―萬孝（十一代）現存者

と有之に、武居氏之調査は信據すべきものと存候

而して元仲は大坂にては盛んに行はれ而欲先刻

謹て歳一書りに及ぶ了覆之一讀候ふに　敬具

醇庵生拝

鷗外先生

侍曹

右鈴木春太郎報

五年八月廿、日

拝啓陳者伊沢蘭軒未聞の件多く日々有難く拝見
致居り候その内小子関係の件に気付候分有之別紙に
認め候處右は寡しく御参考にもなるまじく甚だ
愚にも別紙に認め候件は詳細を山路愛山氏の主幹たりし国
民新聞所載の拙文「本朝易学の盛期」(四十五年一月十七日三面より五月下旬三面九日まで)
中に記しおき候得ば御参考迄に候也

大正五年四月廿八日

伊澤蘭軒　その五十二

○元仲は肥前神崎郡西村の人向井兼義の子であつたと云ふ＝元仲は兼義の孫にして、兼義の二男由右衛門兼秀の二男である

○霊蘭は一女三子の母であつたと云ふ＝元仲の子は五男四女であつて第一は益寿院元端仁寿子と称し父の業を継ぎ京都に住し医を以て家を成す。次は女子、名は春、早世で、次は平三郎兼時、義寿子元淵といひ早世未分明である。次は女子名は佐世、宇野氏に嫁す。次は小澤太兼丸、即ち字は元成といひ禮寿子と称す。次は七郎左衛門利文、久米氏の養子となる。智寿子と称す。次は女子名は千代、清水氏に嫁す。次は坪左衛門兼之、信寿子と称し慢笑と号す。次は女子名を八重と云ふ。

衛亭説中の一女三子と有るは知らぬ何れか。次子と季子とは順序も異なり又俳諧をよくすと云ふ女子は系譜に見えないから、探り見受けか。系統に付ても

森 林太郎先生様

於木南陵ね

小子「最古の聖劇」認めし際、向井兼孝の次男ト小子思惟の夫ニ有之候為め
向井家系譜借用参考ニいたし候之ニ依つて先哲叢談ニ其他二三冊ハ
誤りを正し次男ト有之候。

その五十六　付記正誤文中

鈴木酔庵君の序訂正の分ニ
元成より兼命兼般兼美を経て元仲ニ至り、元仲の後兼哲云々ハ元
来向井氏を代々字ニ元の字を用ひ、諱ニ兼の字を用ひ居りしハ次男の様見受
けられ候系譜ニよれハ元成兼丸、元欽兼命、元仲兼般、良翰兼美と示し候、
序ニして酔庵氏訂正の兼般と元仲とは全く一人ニ有之候ハみならず兼美を元
仲の長男ニ有之候。

右鈴木好太郎報

中西淡淵

名維寧。字文邦。稱曽七郎。為竹腰氏臣中西曽兵衛
養子。本秋元氏。修云元。寛延庚午（三年之）入江戸。居芝三
嶋町。起叢桂社。紀平洲、小河仲栗從學。宝暦二
年七月十五日歿。年四十四。出于叢談、續叢語。

紀平洲

尾之儒官也。名德民。字世馨。一号如來山人。細井氏。稱甚三郎。尾之平洲村農。學名古屋秋元澹淵。入江戸。住芝三嶋町。澹淵叢桂社。澹淵歿後帰平洲。与秋山玉山、瀧鶴台、淺井太室、南宮大湫交。尾州侯聘之。又為米澤侯賓師。主古語。享和元年六月廿九日歿尾邸。年七十四。出于叢談後篇。

南宮大湫

江ゝ人。名岳。字喬卿。一号積翠樓。稱弥六。尾州
其郷也。父仲八。名勝。字子克。仕尾之竹腰氏。
善剣。大湫学于中西淡淵。大湫本井上氏。在京改
南宮。住桑名。又松坂。与紀平洲同門。紀在江戸大
湫亦入都。号烟波釣史。安永七年三月三日歿。年
五十二。出于先哲叢談。
子壽。字大年。号藍川。稱大助。出于同書。

宗豊洲

△及建石

新光明寺

豊洲宗先生墓

文化六年己巳五月七日豊洲先生宗君疾没。富山
侯嘗師事君。(中略)門人請侯親題其面。又使
金銘其陰。君諱長達。字伯盈。稱彦太郎。世
東都人。考數馬君。諱智高。妣竹山氏。以寶
暦戊寅三月廿六日生君於萱葉街。君(中略)師
大湫南宮先生。(中略)大湫没。以吾平洲紀子。與
大湫有兄弟之誼。君又從學焉。紀子(中略)以女女之。
初君(中略)為幕府前軍寄騎。從居本郷。居數
年。(中略)辭令弟直道代。下帷郷南教授。(中略)

廿三

君享年五十有二。葬淺草新光明寺先塋之次。紀
氏先喪。生一男一女。男夭。再娶麻田氏。無子。甲
斐友人久留米府學明善堂教授樺嶋公礼銘。
黒川敬之謹書。

宇野栗山

名邦彦、稱彦助、又号古愚軒、石顛、
讃岐高松人、學于後藤芝山、從之林門 宗宋学、程朱
阿波侯儒員四百石
養姪為嗣、

享保十九年 一
寛保三年 十
宝暦三年 二十
宝暦十三年 三十
安永二年 四十
天明三年 五十
寛政五年 六十
享和三年 七十
文化四年十二月朔歿 年七十四

寛政八年五十三 召出幕府、昌平黌

宝暦十二年 霞山二十九
明和元年 霞山三十一
況成 一
十
二十
三十
四十
四十四
天保八年 況成歿 七十四

岡本況齋

名保孝。号拙誠堂。
通称初右衛門、又縫殿助。
幕府ノ儒員。
明治ノ初、昌平大学中博士タリ。
十一年四月歿。年八十二。
（諸家著述目録、名人忌辰録）

岡本保存、抽斎之友也、明治十一年即世、年八十二、所著之書列于左、

詩癡符　四十一冊

雛沈江　十餘冊

荀子考　五冊

淮南子考　五冊

韓非子疏證　五冊

○塙忠瑤、通称次郎、保己一（本姓荻野氏、通称辰之助）の男なり。流言のために加藤一周と共に殺さる。時に文久二年十二月二十二日一夜、年四十九。

二十二日捨札ニハ夜トアリ

文久二年壬戌　墓所集覧

號温古堂。

名一作忠宝。墓所集覧。

葬于南寺町安楽寺。墓所集覧。寺已廃而　紹学院滋興藤門居士。

著作

南朝編年稿　四十二　　近世武家目録一覧　一

古簡雜纂　十二　　現存書目補正考　五　　解目私抄　一

近世花押分類　　集古文書　二十四　　和学講談所書目　二

豫楽院

近衛家熈、父基熈、母常子内親王。（虚舟、吾楽軒、昭々堂、晏安、

享保十年准三后。

剃髪号真覚。

元文元年薨。謚豫楽院。

澤田東江

鱗、字文龍、又字来禽堂、萱舎、青蘿館、玉嶋、

文治、文治郎、後文藏、 南家、 初平林氏、麟、字子(?)瑞、号東郊、

林鳳岡門、

学書于頤斎、去倣子、求于明王、倣晋、

家矢倉、

寛政八年六月十五日歿、六十五

寛保二 一

宝暦元 二十

宝暦十三 三十二

明和八 四十

天明元 五十

寛政三 六十

市河米庵　三亥、字孔陽、小左衛門、

安永八年九月生于楢町、

仕官山侯、

嘉永二年己酉致仕、七十二

安政四年七月十八日歿、八十（七十九たるべし）

男三亂。

孫三陽

安永八年、一
天明八年、十
寛政十年、廿
文化五年、卅
文政元、四十
十一年、五十
天保九年、六十
嘉永元、七十
安政五年、八十

米庵先生略年譜 並一年一蹟陳列品目

（括弧内氏名は出品者其他は總べて小山林堂藏）

年齡	年號	干支	陳列品目
一歲	安永八年	己亥	
二歲	安永九年	庚子	
三歲	天明元年	辛丑	
四歲	天明二年	壬寅	
五歲	天明三年	癸卯	
六歲	天明四年	甲辰	
七歲	天明五年	乙巳	
八歲	天明六年	丙午	
九歲	天明七年	丁未	
十歲	天明八年	戊申	
十一	寬政元年	己酉	楷、飲中八仙歌（益田香遠氏）
十二	寬政二年	庚戌	行、擬古、四十一歲詩合裝
十三	寬政三年	辛亥	
十四	寬政四年	壬子	
十五	寬政五年	癸丑	
十六	寬政六年	甲寅	手紙
十七	寬政七年	乙卯	
十八	寬政八年	丙辰	各體臨書「金洞墨妙」栗山跋
十九	寬政九年	丁巳	
二十歲	寬政十年	戊午	行、古詩七絕
二十一	寬政十一	己未	臨孫過庭書譜卷
二十二	寬政十二	庚申	行、放翁詩鈔序（版本）
二十三	享和元年	辛酉	細字、米家書訣 板下自書（版本）
二十四	享和二年	壬戌	行、白樂天詩手本
二十五	享和三年	癸亥	細字、西遊日記
二十六	文化元年	甲子	筆語
二十七	文化二年	乙丑	各體臨書雲潭畫合裝
二十八	文化三年	丙寅	漫抄「法帖所見」
二十九	文化四年	丁卯	楷、樂毅論臨本
三十歲	文化五年	戊辰	行、臨米帖（林經明氏）
三十一	文化六年	己巳	行、戸川眞齋摹天馬賦跋
三十二	文化七年	庚午	行、七律
三十三	文化八年	辛未	行、謝在杭語 讀未曾見云々
三十四	文化九年	壬申	行、蘭亭序
三十五	文化十年	癸酉	行、獨樂園記手本
三十六	文化十一	甲戌	隸、試毫帖跋（版本）
三十七	文化十二	乙亥	行、荒木寬快畫仙人圖題詩
三十八	文化十三	丙子	行、父子兄弟合作
三十九	文化十四	丁丑	行、吉語七言二句
四十歲	文政元年	戊寅	行、元旦七絕
四十一	文政二年	己卯	行、七言二句、十名家合作
四十二	文政三年	庚辰	行、七絕扇
四十三	文政四年	辛巳	行、謝惠石詩三首（本田定壽氏）
四十四	文政五年	壬午	手紙
四十五	文政六年	癸未	行、放翁七絕
四十六	文政七年	甲申	隸、七絕潑墨雲潭恭齋合作
四十七	文政八年	乙酉	細字、羅大經玉露一段 扇
四十八	文政九年	丙戌	行、自畫淺絳山水題詩
四十九	文政十年	丁亥	行、四十九生辰自壽吟
五十歲	文政十一	戊子	隸行、壽海野蠖齋書
五十一	文政十二	己丑	臨懷素千字文卷
五十二	天保元年	庚寅	行、詠富岳七絕、文晁畫合作
五十三	天保二年	辛卯	行、聯語
五十四	天保三年	壬辰	行、林之盛詩書畫論（小倉高嘉氏）
五十五	天保四年	癸巳	行、蘭亭序
五十六	天保五年	甲午	細行、源鱗山水幅題詞
五十七	天保六年	乙未	草篆、桃李園序 扇
五十八	天保七年	丙申	行、園亭偶成四首扇（太田子爵）
五十九	天保八年	丁酉	章草、揚誠齋梅花賦 扇
六十歲	天保九年	戊戌	隸、聯語
六十一	天保十年	己亥	行、樂志論 艮齋跋
六十二	天保十一	庚子	行、謝惠石詩、贈金森巖庵
六十三	天保十二	辛丑	行、示姪岡本武德詩
六十四	天保十三	壬寅	行、金人銘（比留間邦之助氏）
六十五	天保十四	癸卯	行、題文房四寶詩（大澤雄吉氏）
六十六	弘化元年	甲辰	草、偶興七絕 爲恒庵
六十七	弘化二年	乙巳	行、列先鋒隊長詩稿、
六十八	弘化三年	丙午	假名、壽家慈八十八歌稿、
六十九	弘化四年	丁未	草、自畫梅弁題詩
七十歲	嘉永元年	戊申	行、五字一行 悠然得佳趣
七十一	嘉永二年	己酉	草、謝熏紙詩薩世子云々（林經明氏）
七十二	嘉永三年	庚戌	楷、孝經版下稿（本田定年氏）
七十三	嘉永四年	辛亥	行、衰翁吟、松堂畫肖像合裝
七十四	嘉永五年	壬子	章草、明人聯語（石原義皓氏）
七十五	嘉永六年	癸丑	草、論書七絕 紙墨爲堆云々
七十六	安政元年	甲寅	草、愛蓮說 岡本黃石舊藏
七十七	安政二年	乙卯	草、五言二句 夫君者有智大仁者則德
七十八	安政三年	丙辰	行草、新居戲作七絕、（鮏延氏）
七十九	安政四年	丁巳	草根書畫蘭石並題詩
八十歲	安政五年	戊午	草、邵康節詩 爲林洞海（林若吉氏）

東京市麹町區飯田町六丁目十二番地
樂墨會本部
振替口座東京参〇七六六

大正五年五月初旬于小山林堂開會

樂墨會刊行

（追加）

草、精英二字並語額（天保元）牧穎元氏

行、寛齋翁詩（二十歳頃）本田氏

草、大字天馬賦卷（安政五）林經明氏

生方鼎齋

寛、字猛齋。称造酒。

上野沼田在鎌原村人。

安政三年正月七日往村松町福田半香家、會水戸劍客金

子武四郎、厚之、武四郎門人斬鼎齋。五年五十八。

（見好世の友）

福田半香、名吉、字吉人、又号曉齋、曉夢、小字磐二郎、

遠江見附人、勾田台嶺渡辺華山門人、

晩居根岸、根岸村舍、元治元八月二十三日歿、年六十一、

葬小石川善仰寺、

橘千蔭

芳宜園、耳梨山人、逸乗寓、任翁。橘八衢（狂歌号）

稱加藤又左衛門、又位与麿。

父枝直、町奉行与力。住八丁堀。襲父職。

天明八年辞。

文化五年九月二日殁、年七十五

岸本由豆流

岸本由豆伎。

安政七年板大江戸和歌集ニアリ

卅三

前田夏蔭

称健助、号菁園。江戸人。清水濱臣門。

晩年仕幕府、与蝦夷開拓之事。

元治元年八月二十六日歿、年七十二（秀芳雅談）

大江戸和歌集 安政七年板本

前田健助菅夏蔭

〃 健次郎菅夏繁

谷文晁

名文朝。後修文晁。通文五郎。○下谷二長町ニ住。

写山楼、画学斎、蜨叟、無二ノ号アリ。

剃髪シテ文阿弥ト称ス。

（寶暦十三年九月九日生

麓谷 父 ── 文晁 ── 文一

加藤文麗（名泰都、号鶴翁、従五位下伊予守、狩野派、天明二年三月五日歿、年七十七。）ヲ師トス。後北山寒巌（名孟熙、字文奎、ハ先手与力、寛政三年五月十八日歿、墓今戸ノ広楽寺。）ニ従学ス。

田安家ノ画師トナル。

○○天保十一年十二月十四日歿ス。年七十八。（天保十年ハ七十七ガ実）

浅草源空寺ニ葬ル。

下谷和泉橋通住。文化十三年五十三歳卒（同上）（擁書楼日記）

游龍梅泉

梅泉 ── 梅村（彦十郎）孝藩人（善書　號和亭在其家）── 暁園（彦三郎　実子）

磨作（畏子）号秋苑（何空家女）── 隆吉（服部氏出）

継室服部氏、吉野春行女

太田覃

太田覃（フカシ）、（字子耜、）直次郎、（後七左衛門、藤原氏、）南畝、蜀山人、杏花園、巴人亭、遠桜山人、（明和二年）
南極老人、四方赤良
徒歩衆、後支配勘定、十一年大坂銅座、（寛政六年甲寅、学文吟味、八年）十二年竹橋書物調、文化元年長崎出役、
初牛込二十騎町、後小石川小日向金剛寺坂下、△又駿河台紅梅坂。
駿河台太田姫稲荷前住。（五年[illegible]出役、七年辞職。）

寛延二巳年三月三日生。
文化十二年六十七歳。（甲上）（擁書楼日記）
文政六年癸未四月六日歿、年七十五、杏華園心逸日休、原町本念寺、（日蓮宗）

文化三年五十八歳（三陽）
△文化十一年十一月カ十二月カ、氏（茶山行）

山崎美成

長崎屋新兵衛 長者町二丁目[illegible]（[illegible]）

「家根屋三左衛門」

文化十二年八月、北慎言来る。「新橋わたりにすめる家根屋にて、世稱を三左衛門、号を梅園とも静廬ともよぶ、これぞ今の世にたぐひなき博識先生といふべかりける。」（擁書楼日記）此年五十七、年齢（同上）家は新橋金春屋敷。（同上）

本所 横川町 本光寺
大正拾四年磨 糸目谷
濱口家前へ 同名寺

柳成 柳嶋 柳川墓

∴ 司直（同書 日立（大江戸奇集 安政七年））

光照 恒之助 源良懐（大江戸和歌集 安政七年板）
昌房 和温（号也）

柳川 甲子太郎
昭和十七年十二月 死
後八十歳 父亡

本 配 久保氏 廣小路飴屋 亡
後十二歳 母亡

下 後三郎 イト

博物館ニ勤
高知ニ往ク
無嗣
南洋ゴム栽培
井上某嗣
久保氏府下石油会社
社林田所長ノ所ニ
アリ

目下 府下 南葛飾郡 小松戸町 一〇二七 住
加藤直方

佐藤家ハ親戚也

八　一齋 ―― 新九郎 ―― 善吉之
　　　　　　　　　　　　戎屋多十
　　　　　　　　　　　　高倉
　　　　　　　　　　　現存

右大正五年四月二十五日成嶋復三郎来話筆記

源高湛

○宝田寿来「宝田はもと神田より出たる名、昔関ノ戸の浄るりを書たる宝田寿来かゞといふ。」（作者店おろし）

初代劇神仙ハ宝田寿来、通称金之助、又号閑雅、寛政六年八月歿、年五十七。

寿阿弥

文時二世劔神仙と称するものありき。氏ハ長嶋又江間、名は秋邦、真志屋五郎作と称す。一に五郎八ともいふ。新石町の菓子商なり。劔に精し。打本章四郎、七世団十郎も此家と戌人に同し。嘉永五年壬子団十郎蓮生坊に扮し、一に寿阿弥の型に従ふ。寿阿弥即二世劔神仙なり。石塚豊芥子御棚より寿阿弥と呼ぶ。抽斎山人と交り、二世劔神仙と称す。寿阿弥ハ常に一升徳利に水をいれて持ち行き、途上小便するときは、其水にて手を洗ふ。寿阿弥ハ明和六年己丑生れ、嘉永元年戊申歿す。年八十。

日輪寺其阿

芝崎町日輪寺ハ浅草公園活動写真館ニ近キ新屋ノ横寺街當ニアリ

墓地半ハ沼澤トナリテ蘭等ヲ生ズ墓ヲ検スルニ由ナシ

其祖相州鎌倉人。豊芥子ノ祖父天明中移居。

○豊芥子。石塚氏。[illegible]。住豊住町。號集古堂。

世々粉商なり。からし

[illegible]を以てなり（ことあり。）。故にからしやと云ふ。（豊島町）

豊島町の芥子屋なればとて豊芥子と云ふ。

自ら芥子の匂を諱むことあり。店にてなり。

屋號ハ鎌倉屋。通稱十兵衛。一作重兵衛。

後（嘉永元年）浅草諏訪町に移る。町の西側角なり。

文久元年 京に上る。途に病む。十二月十五日没。年

六十三。

浅草報恩寺（北清島町）に葬る。寺中の常念寺也。法諡豊芥信士。

二女あり。長女に壻を迎へしに、放蕩なるを以て離別

す。晩年に移るに及びて、又塲とよび返す。

河竹新七は人の誘ひにて點取俳諧の弟子となりし切なる基

と守護す。其後は亡し。

始め割家にて歌舞伎年代記等の著あり。脚引、草稿にて袖裔を掃ふことありき。芝居より湯を勝に垂しなどす。此ありき。五分まだ袖裔に嫁せざる時袖裔と協ひしに、豊芥子は合せて、竹の皮包の餅と出し、五百に依めしことあり。

豊芥子

北清島町報恩寺内専念寺

晩酌し居りし僧、肥エタル梵妻、美しき十五六ノ少女

本堂ノ右ヒアヒヨリ行キツキアタリ

釋

先祖 道栄信士
安永九庚子十二月十四日

二世 常信信士
文化十一甲戌二月朔日

三世 錦現信士
文化元甲子六月廿五日

四世 豊芥信士
文久辛酉十二月□四日

鎌倉屋

豊岡子女千葉縣幕張在ニアリ其女東京ニ奉公
ニアリ幕張ノ女八年一二度入京スト傳フ了

津房

摂津国尼崎ノ人、初子之助、居山城河岸、
名鐵、又德、字冷和、号春坂、（好坂、交坂、孝坂）
號角（雲間）桂川派　（文久三年ヨリ上下流中川
　慶應三年再入京、）
明治三年九月十日歿、行年四十九、

文久元年
嘉永元年
天保十三年
天保三年
文政十一

	文化十三	十四	文政一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
壽	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
(巨)一齋	四十五 此年五十六卒夜舍	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六
(書)雨齋	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九
(写)文晁	五十四 二番町	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五
(詩)夏茗	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五
(狂)南畝 久	六十八 スルガタ紅梅坂	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五				

諸生ハ元文元 書生前八十年

五書生前八年前

—	十一	十三	六十七	三十	六十六	三十六
—	十二	十四	六十八	三十一	六十七	三十七
天保	一	十五	六十九	三十二	六十八	三十八
	二	十六	六十	三十三	六十九	三十九
	三	十七	六十一	三十四	七十	四十
	四	十八	六十二	三十五	七十一	四十一
	五	十九	六十三	三十六	七十二	四十二
	六	二十	六十四	三十七	七十三	四十三
	七	廿一	六十五	三十八	七十四	四十四
	八	廿二	六十六	三十九	七十五	四十五
	九	廿三	六十七	四十	七十六	四十六
	十	廿四	六十八	四十一	七十七	四十七
	十一	廿五	六十九	四十二	七十八	四十八
	十二	廿六	七十	四十三		四十九
	十三	廿七	七十一	四十四		五十
	十四	廿八	七十二	四十五		五十一
弘化	一	廿九	七十三	四十六		五十二
	二	三十	七十四	四十七		五十三
	三	三十一	七十五	四十八		五十四
	四	三十二	七十六	四十九		五十五
嘉永	一	三十三	七十七	五十		五十六
	二	三十四	七十八	五十一		五十七
	三	三十五	七十九	五十二		五十八
	四	三十六	八十	五十三		五十九
	五	三十七	八十一	五十四		六十
	六	三十八	八十二	五十五		六十一
安政	一	三十九	八十三	五十六		六十二
	二	四十	八十四	五十七		六十三

三	四十一	八十五	五十八㊉	六十四
四	四十二	八十六		六十五
五	四十三	八十七		六十六
六	四十四	八十八㊉		六十七
万延一	四十五			六十八
文久一	四十六			六十九
二	四十七			七十
三	四十八			七十一
元治一	四十九			七十二
慶応一	五十			
二	五十一			
三	五十二			
明治一	五十三			

雜記 己未 人名類

二

H20
523

東京帝國大學圖書印

B 23475

000432853 0

佐藤一斎

坦、字大道。又号愛日樓、老吾軒。號曰百之寮、風自寮。

所聘息曰錫雉老軒。初名信行。称幾久蔵。年七十一。

後捨蔵。世仕岩村氏。

寛政二年侍述斎。々々未嗣林氏也。

三月八日辞仕。

四年遊大阪、従宗師。

五年入林簡順門。同月卒。述斎嗣。

十二年四月帰江戸、至平元。

鷗外藏書

文化二年為林氏塾長。
文政九年為岩村氏師範。
天保十二年十二月為幕府儒員。住昌平官舎
三年布衣。
安政六年八月二十四日歿、年八十八。葬麻布深廣寺。

一斎
弘化四　七十六
安政六　八十九
一　安政六年歿八十八

侗庵
六十
侗　弘化四年歿六十

澤村西陂

名は遒、字は子寛、宮門と稱し、西陂と號す、食祿四百石、穿鑿頭高瀬町奉行、時習館助教等を勤む、安政六年八月十六日歿す、享年六十、飽託郡高平に葬る、

亡友西陂澤村君墓碣銘

肥後藩西陂先生澤村君、既歿之明年、其孤士發、以書屬余銘其墓、且曰、先子終身坎壈、無一事之足傳者、顧知先子者莫如先生、是以敢請、特錄其所知而止焉可也、嗚呼余何能忍銘君、念昔游佐藤先師之

門、君與同藩町野鳳陽先在、於是始定交、晨夕共研席、相視而莫逆也、此時君年方壯、頗駘宕喜放、余或因事規切、輙謝曰、子之言是也、又屢謂余友誼甚樂、其言歷々若前日事、而恍然一夢、已三十餘年矣、其間相見者再、皆于役之次、促膝握手、僅數刻耳、無暇談及學、未能知其晩年所造、而遽至於斯、方以爲憾、何能忍銘之、雖然思士發之言、良可哀矣、鳳陽亦書督之曰、不朽我友于之任也、豈其可遂已耶、按君諱邁、子寛字也、西陂號也、其先桃井氏、出播磨守直常、直常五世孫諱直重、改氏澤村、其子諱吉重、自若狹來州後、始仕藩、勇武積功、食一萬千石、世爲巨室、是爲君大宗、又八世曰諱正氏、配神足氏、君之考妣也、寛政十二年三月二十二日、安政六年八月十六日、其生歿年月日也、君生而失恃、甫七齡、正氏罹疾、以君之尚幼、養野々口氏諱正常爲子、既而歿、正常承家、又以君爲嗣、君及長、狀貌頎碩、襟度曠達、自負豪材、欲一旦有所爲、時發諸論議、纚々有條理、接人率意不修邊幅、而中自存藹然氣象、然視其齷齪不諧於己、便直斥之、無依阿之言、以是往々與俗忤、竟弗之恤也、而名亦益興、有西海大男子之目、其學不屑

章句、務在明大義、故尤契明儒諸説、好作詞章、不事刻畫、攄其胸臆已、始終篤信先師、毎獲一言、奉之如著蔡、凡四任職、始為獄曹長、未久而罷、為高瀨市尹、継轉司語、最後遷國學助教、辭之、得年六十、卜葬高平村先塋、娶梅原氏、子男一、修藏、即士發也、女三、其二倶夭、吁嗟若君之材、少折節、委曲其跡、篤叡有其人而善用之、將有展布顯揚於世者、今則已矣、蓋我三人鳳陽最長、余次之、而君則少、余三齡、長者存、而少者先逝、回顧人世死生壽殀之間、其不可知者如此、然而君子固有不貳者矣、況瑣瑣窮通末事、不足為我子寛言也、銘曰、

遂々華胄以武傳些、績存前史方炳焉些、継之者文道乃全些、將昌爾後亶其然些、世風不古恍善柔些、偉傑之士被吹求些、銖稱寸度恣搖吻些、天之未定那必憤些、畜極而發澤之長些、姑俟孫子永餘慶些、高平之阡鬱幽窆些、築之已堅安體魄些、

萬延紀元庚申冬十月　阿岐　吉村晋拜撰

一肥後同志澤村西陂尤喜舊本大學、癸丑冬邂逅江都、首見徵鄙説之可備參檢者、余諾而未果、近者

適罹脚疾、家居數月、人事頗簡、乃取所嘗手記、略次第之、遂以就正焉、諸大義之所存、斷以己之意、其他則多沿前輩諸説、差加檃括、名曰大學臆義、嗟夫檮昧之見、豈謂足副懇々、特以久要情誼、有不可辭者爾、龍集乙卯立夏後一日、安藝後學吉村晉謹題、　大學臆義序

一佐藤一齋初陽明學を講究せし頃、在塾の諸生に美俊多かりし時の狂詩に、

國分稱儒吉村晨、田邊山田色漢同、長戸既爲江戸子、若山漫學平山風、川田歸省知何故、澤村戒言遂是空、肴齋唯爲酒奔走、不如恕三勤筆工、

國分は平藏と稱し、仙臺の人、吉村は重助と稱し、安藝の人、田邊は歸一郎と稱し、岩村の人、山田は中藏と稱し、唐津の人、長戸は寛司と稱し、美濃の人、若山は壯吉と稱し、阿波の人、川田は八之助と稱し、讃岐の人、此時一齋の婿とならむとすることとありしなり、澤村は九門と稱し、肥後の人、以上の諸士は後或は幕府の儒官と爲り或は各藩の儒員と爲る、又肴齋は市村氏、信州川中島の醫者なり、恕三は羽田氏、仙臺の

人、當時學僕同様にて、日々一齋の著述欄外等の書を寫し居りしなり、扨此詩は、何人の戯作なるかと、塾中評議の末、長戸得齋の手に成りしと極りたり、其故は長戸既為江戸子の句あり、若既の字を未の字に代なは、終に其作者は分らざりしに、誠に惜むべきことなりと、一同大笑せりと云、逸話文庫 毎日新聞

一澤村武左衛門、名邁、字伯黨、號西波、熊本人、文政九年丙戌九月十四日、入佐藤一齋之塾、後改稱宮門、名邁、字士寛、佐々鵜巣著述 交遊人名録

松田道夫の文は信濃国佐久郡岩村田の城主内藤豊後守正縄の醫官にて（中略）同藩の佐藤一齋に師事し専ら林述齋の講定に列した既に一齋は幕府に召され高足若山勿堂か藩の文学の後を襲ふた

と有之ハか

林述齋は東濃岩村藩主松平（大給）能登守乗薀の次男に生れ松平樂翁公の推挙にて林家を嗣きし人たり佐藤一齋は今藩臣の子たり若山勿堂は今藩の文学たり

岩村は美濃国恵那郡岩村町にして中央線大井驛より南二里にあって軽鉄の便有之ハ

若山勿堂

村松梅園の住居原唐学者揃ふ抜抜きは昨年一月頃
森鷗外氏作記に関し其意をもしたる抜きに
氏節内記述の伊澤蘭軒傳面白く相成候ぬるが
る五月廿四日掲載の二百九十一回に
松田道夫の父は信濃国佐久郡岩村田の城主内藤豊後守正縄の醫官にて（中略）同藩の佐藤一齋に師事し旁ら林述齋の講筵に列した既に一齋は幕府に召され高足若山勿堂か藩の文学の後を襲いた
と有之いか
林述齋は東濃岩村藩主松平（大給）能登守乗薀の次男に生れ松平楽翁公の推挙にて林家を嗣きし人なり佐藤一齋は今藩臣の子なり若山勿堂は今藩の文学なり
岩村は美濃国恵那郡岩村町にして中央線大井驛より南二里にありて軽鉄の便有之い

迹齋と一齋との関係を知るには一齋著言志晩録
附録別存中に
公（迹齋）之在岩邑藩也、齢十七加冠、侯特命
先父為帽親、侯（岩村侯）遊盤及柳枝、余時十三歳
訖、公謂余曰、帽親之子猶兄弟、終身不相離（？）
也云々

若山何堂か岩村藩文本たりしは大日本名辞書
に明たり

依て乃記迹は美濃の岩村と信濃の岩村田とに関
し何等かの相違あることなしいむも松田道夫氏
は信濃の人なりや美濃の人なるや兼ねてきけば
右氏付ト点乃報を乞ふ、寺号まゐ以下幸
甚です

昭和六年六月十六日

森林太郎殿

勝見 政友

（寛政七年）生
奥州安積郡之山人ナリ八幡祠官安藤筑前親重ノ子。
（寛政十二年）十六歳 近村ノ今泉氏ノ婿トナル。女ニ嫁ハル。
（享和元年）十七歳 奔リテ江戸ニ入ル。一齋ノ僕トナル。
（文化二年）二十一歳 林門ニ入ル。（昌平黌）
（文化五年）二十四歳 二本松藩ニ仕フ。見山楼ト号ス。
（文政八年）四十一歳 文稿三巻ヲ刻ス。
（天保元年）四十六歳 丹羽侯ノ文学トナル。
（天保七年 五十）

宮信、信、経、紀、勅。

妙原寺月明ノ一
鶴見十七歳ニ 本松至江戸
諸侯御、与悔斎井戸君桐ノ郷
文政二年己卯四月降着二本松
房寅四三月往郡山、二本松、
天保二年辛卯
林鶴席文稿、凶
二唯正月明趣房流
平生未曾治一郎、△
錦山詩

（寛政七年生）一歳
（文化二年）十六
（文化三年）十七
（文化七年）二十一
（文化十年）二十四
（天保元年）四十一
（天保六年）四十六

迹齋と一齋との関係を知るには巨一齋著言志晩録附録別存中に

公（迹齋）之在ニ岩巖邑藩也、齢十七加冠、侯時命先文為ニ帽親ー、侯受進盃般盃及柳枝、余時十三歳訖、公謂余曰、帽親之子猶ニ兄弟ー、終身不ニ相離ー也

也云々

若山司堂か岩村藩文斉たりしは大日本名辞書に明なり

俤て乃祀迹は美濃の岩村と信濃の岩村田とに関し何等かの私逸あらざとおしいむも様白眉迹夫氏

安積艮斎

△天保二年嘉平月大塚撰跋文略云、先生布衣窮居云々。

重信、信、稼祐助。

奥州安積郡々山人。八幡祠官安藤筑前親重ノ子。（寛政三年生）

（安政七年レ歿）（寛政十二年）十六歳　近村里正今泉氏ノ婿トナル。女ニ嫌ハル。

（享和元年）十七歳　奔リテ江戸ニ入ル。一齋ノ僕トナル。

（文化元年レ）（文化二年）二十一歳　林門ニ入ル。

（文化五年）二十四歳　駿河臺土屋邸辺ニ轉ズ。見山楼トイフ。

（文化十一年）（文政八年）四十一歳　文略三巻ヲ刻ス。

（天保元年）四十六歳　冊羽（ニ）文字トナル。

（天保五年）五十一　中元八月迹仟宍

移郭所

妙屋寺月明ノ一

小篠儒川御、ち悟齋井戸君綱嚶郡

鯢目十七自二本松至江戸

文政二年己卯四月歸省二本松

庚寅国三月往郡山二本松、

天保二年辛卯

林鯢序文略

二十二日明哲房後、平生未嘗絶一詩、△錯山詩

（寛政三年生）一六

（文化二年）十六

（文化三年）十七

（文化七年）二十

（文化十年）二十四

（天保元年）四十

（天保六年）四十六

天保七年丙申
帰着二本松安
達太郎山之
傍、卿論四十
如き。
天明五年生、
五十二
寛政年七十
十ラ八四十七

（天保八年）五十三歳 奥州二本松ニ往キ藩ノ学ヲ教授ス。〔門下帷従、己ニ三十余年〕

（弘化元年六十）甲辰 肩ニ至ル江戸、家郷ヲ去ル。

江戸ニ帰リ永田町ニ学塾ヲ開ク。

嘉永三年（六十六）六十六歳 四年 藩邸ヲ授ケラル。官舎ニ住ム。

（安政元年七十）万延元年十一月二十日没、七十六。（妙源寺内ニ葬ル）

本所番場町妙源寺ニ葬ル。

男文九郎 重允 嗣ク。

賜謚、

「天保十三年」 五十三

（嘉永三年 六十六）

一化 七十六

嘉永六年

林 韓

文 斎

還二本松、茂開春秋八十有六、
家兄亦北甲一周忌、

四 天保二、辛卯、儒学四十余、

廿 天保九年戊戌九年十三、

八 文政九年生一歳、
万延元年三十五歳、

⊗ 天保十四年癸卯、

朝川善庵

松浦侯医官（ヒゼン）

門、字五鼎、江都人、

片山兼山 — 世瑞、字叔瑟、向上毛生江戸、

配原氏 再嫁

朝川默翁（信、字子順、本姓井氏）

配原氏

男 寿美 嫁福山氏

某 道昌 父磨 ... 嫁 去山氏

門 配春田氏

信子 配二女人 去嫁 井笹氏

乙 準 配 松岡氏

格、字天錫 冒片山氏

某 殤

次女 嫁 大須氏

三女 塚川氏

一斎 天明三年生、

天明元年辛丑四月八日生一歳

寛政四年 十二歳 山本北山ニ学ブ、年十六、

寛政戊午之古時（十年）、年十八、

仕松浦侯、（文化三年より）松平肥前守（治邑）（元肥前守 [illegible]）

文化十一年甲戌養父死、年三十四、（迷庵五十五 頼翁五十一）、

十二年乙亥 下田ニ隠居セシ唐人ト争ヒ [illegible]。

播磨守（寺社）叡（天保十一年より 内評定所 [illegible]）

弘化三年 [illegible]。年五十六　年三十五、

嘉永元十二月病。年五十八

二年二月十日歿、年五十九、

一斎七十五、（文政九 迷庵六十六 頼翁六十二）（成斎五十二）

一斎七十七

一斎七十九（成斎五十九）（抑斎七十五）

市野迷庵

醉堂記

澁江定所

夫人之有好也。人情之必所不免。而唯好讀書。最上善事。蓋学人之所以為人之道。棄此而何適。士君子之所不可不以務也。怪近世少年輩。僅好讀書。動輒流于俗儒。聖讀而庸行。漫乎不内自省。悪在人之所以為人也。余友俊卿。卿好讀書。孜々矻々。今已学成。游道日廣。則余亦時々相會而講習焉。於是乃謂有是哉益友也。我得若人。而吾学亦稍進矣。今夫俊卿。篤信守業。餘力則学文。孝以事親。信以交友。郷黨称其為人也。可謂讀書以学人之所以為人之道者矣。

俊卿嘗自扁其讀書所。曰醉堂。客曰。我識俊卿。爰有年所。而未嘗見露醉于酒也。何以為醉也。曰。方今昇平二百餘年。吾儕小人。幸為堯舜之民。當是時。以俊卿之才之珍也。私淑聖人之道。旁通百家之書。賦詩作文。優游以終歲。詩曰。既醉以酒。既飽以德。由此言之。俊卿之從事斯文。非醉聖世之德澤乎。客曰。唯々。是為記。寛政元年九月十八日。

「保曰。定所。明和元年甲申生。此年二十六歳。市野迷庵明和二年乙酉生。此年二十五歳。

定所ハ安永七年、十五歳の時に[illegible]

拜啓本日の伊澤蘭軒その七十四に久保筑水の事を論じて「青柳東里の續諸家人物誌には載せてなし」と有之候得共、五十二葉表村卜總の次に記載有之候、但し目次には脱逸致候、又「信濃の人なるべし、安藝の人なりとも云ふ」と有之候樣に筑水の郷國に就いては二說有之候得共彼自身は荀子增注の序にも標注淮南子の序にも「信州久保愛」と明記致候、故、信濃の人なるべきかと奉存候、藝備偉人傳に廣島の人と致候は聊疑敷相覺申候、匆々不宜、

大正五年九月十一日

井上哲次郎

森林太郎殿

霞亭摘稿詩題

北條霞亭

序「丁卯春三月江戸鵬齋亀田興撰、受業巻大任書于新斥霧廼軒」

「同高田藩侯佐野子寧集松浦氏家、主人素精于茶理、子寧畫生」

「讀考亭先生傳」七律前半、「大醇之學在斯賢、惜是聰明識見偏、無極説虚無乃老、本然談性本如禪」

「寄平安伯恭先生、東山高卧厭塵纓、塵纓、東帛安車猶欲迎、受易我慙丁子褢、傳詩竊比

鄭康成、林泉慕跡奈索約、花月關心酒社盟、
藉甚名声何足異、關西孔子即先生」、
「贈和氣行藏」、予来江都、交遊頗多、就中最所
親善者、為君及木遠恥・藤文竜、比歳遠恥文竜
相継淪謝、獨於君往来如故、頃君梓其所著柳
齋筆記公于世、予喜其擧、賦此以寄、舊盟頻
謝益慘悽、唯喜與君歡不睽、揚盥銀坊推雪
戸、君近卜居于銀句、維舟墨水柳花蹊、跡同嚴子陪鷗社、
心慕陶公歸柳齋、亨極新論堪吐舌、吾文擬
出覆瓿醯」、

「得家君書、書中閲我意、字々徹肝心」、讀罷
加榮飾、慎為坐右箴」、
「小金原馬上吟」、註、予昔年過此、望筑波山有作」、
「初夏板橋道中」、
「題徂來翁像」、渡邊生態、文場挑戰出謀夸、四
海望風歸一麾、君没洶々群議起、如何皮相
認真騏」、
「時雨岡春日」、
「予生南方、少小出居京師、又客関東、每憶昔
遊、悵然未嘗無并州之感矣、今夏来訪越、留

滞數日、偶得一種野花、花戸呼曰忘京草、秀麗可人、其名亦奇、詩不可以不記、註、忘京草譯美那古和須禮、」

跋「文化丙寅仲冬、谷寛謹識、印「天寶」」

助字辨題言

助字辨初編、霞亭先生述、北越仙城院藏」印朱文「關根」白文「廓如之印」

「年十八負笈京師、謁大典禪師請教。禪師示以一隅。後就淇園先生而正焉。先生為一代鉅儒、其於字義文理、尤極精微、予輩從學之久、授受頗至。」「北條讓識。」

「助字辨初編。霞亭先生述、上伯釋元愚、江戸岡田阜全校。」「助字辨初編畢。」

「霞亭先生著、助字辨二編追刻、中庸統言嗣

漁村先生遺稿序

魏叔子有云、文貴有眞氣。蓋旁證博引、據經憑史、非不辯也、而病於誇矣。異言奇説、翻舊談新、非不工也、而病於浮矣。不誇不浮、眞氣一貫、以發揮其蘊底者、吾於海保漁村先生之文乎見之。余舊貫佐倉藩、先藩主最重文教、延名儒訓導藩士、漁村先生亦其一也。余從聽其講經、講畢質以疑義、先生諄々從問而答、不少倦、眞氣溢面、故其文字直寫胸臆、毫無虚飾、宜矣。先生之文有眞氣也。夫天下眞者少、而僞者多矣。有僞英傑、有僞道德、有僞文章、或有表裝眞而裏實僞者矣、有始於眞而終於僞者矣。蓋其人有眞學問眞道德、則其所發於文者皆眞矣。先生為人温厚

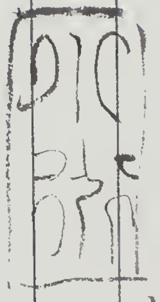
篤實、然臨事毫不變其節、眞氣滿腹、聞有欲薦先生於幕府者、曰、先生變古学、用程朱之説則可矣、先生曰、吾不能変節媚時也、乃罷、蓋先生学問性行表裏一致始終一貫、叔子又云、神明内用者、其致工也深、先生之文、實如此、頃者先生門人川口君東州、輯遺稿求序於余、東州亦有眞氣人也、其所居名曰有眞樓、不媿為其門人矣、余作此序、不用浮誇之辞、從眞写之耳、明治乙巳九月、後学依田百川撰、

小島成齋

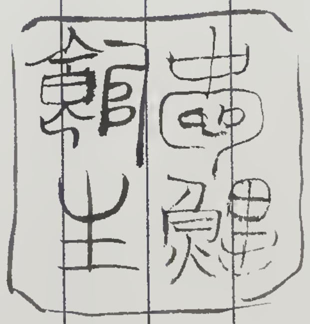
書幅　庭有春松三逕古門餘碧水一溪清

署成齋

傳小島成齋



引首

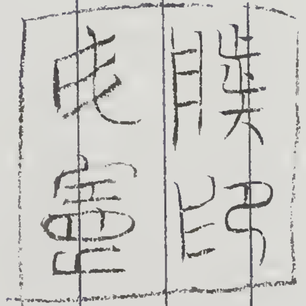


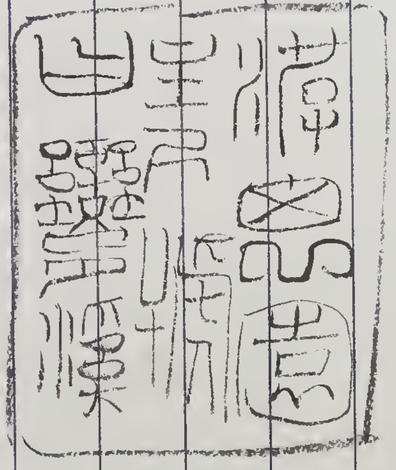
筒井鑾溪

書函　頓首

筆研
遊試

七十八翁鑾溪筒井憲





刀首

棄爽

東條一堂

病圓吟筵凡幾呼童遊扶杖疾如飛人同冬
日誰不愛詩比梅花孰是翻筆下風生律
灰散琴韻氣知鳥声肥一陽来復天心見壯志
休論違不違

瑤池 歎 蝶 吉

右東條一堂詩箋

東條琴臺ニツキ

一、高田市ニ於ケル住所ハ高田市幸橋（サイバシ）町ニシテ幸橋ヶ際ナリ旧城址即チ今ノ師團所在地ヨリ言ヘハ橋ヲ越ヘエテ左側ニシテ市街即チ国道ヨリ言ヘハ東ヘ曲リ行クコト四町餘橋ヲ越エスニ右側ノ橋詰ナリ旧高田家中図ニ依レハ其ノ辺ヲ幸橋長屋トイフ而シ一軒屋ニシテ玄関ハ東ニ向ヒ作ラル城ノ方ヘ向ヒ居レリ打見タル處四五間ニカナシ

一、文政七年林氏ノ門弟ニ列シ昌平黌ニ読講ス同十年高田藩榊原政令ニ聘セラル

政令（マサノリ）ハ明君ニシテ経綸ノオアリ隠居シテ本所ニ住ス普通本所様ト称ス

天保三年事ヲ以テ林氏ノ門籍ヲ除カル（原因研究中）

弘化四年榊原家ニ臣属ス

高知堂製

嘉永三年伊豆七島全図ヲ著シ幕府ノ譴責ヲ受ケ蕃町ニ幽セラル

翌年高田ニ謫セラレ幸橋町ニ住ス

一、下田歌子ハ琴台ノ外孫ナリ　（ソノ系図未タ考エス）

一、蘭語出来タリトイフ　（巻説ニシテ未タ考証スルニ至ラス）

西尾豊作写

原念斎

寒檠璅綴云、原三左衛門（ママ）作先哲叢談、

大日本人名辞書（一七八二頁）に原念斎の死を「文化三年三月十九日歿す時に年四十七」とせり然れとも念斎か先哲叢談を公刊せしは文化十一年か二年なるを以て死後の著となり幕府より銀錠を賜はりしこと林祭酒に召見を受けしこと等の事実に合はす文化三年の化は政の誤りにて文政三年の誤りならん

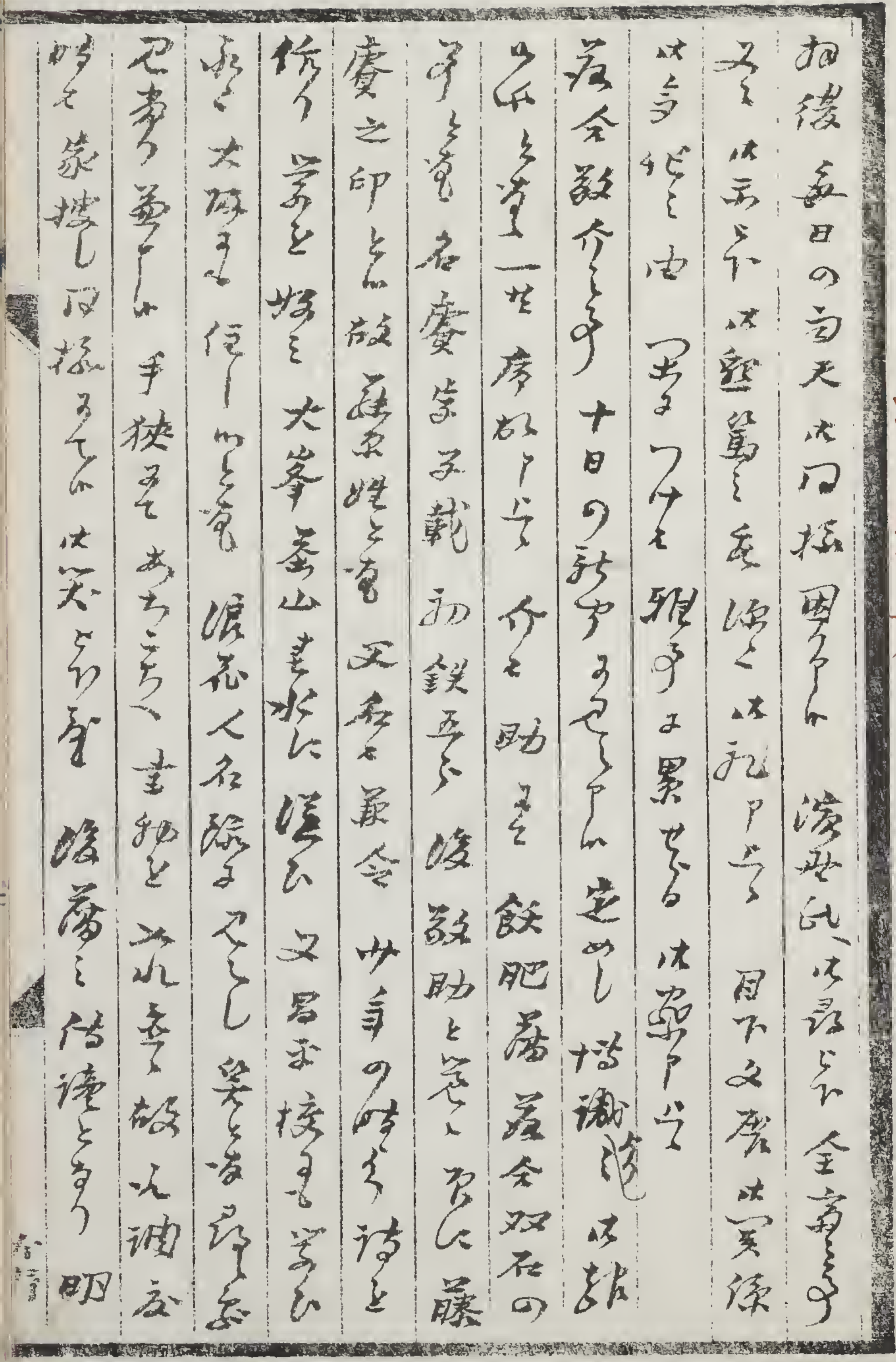
花笠文京

全書（一七四四頁）に文京の死を「萬延元年六月（或は云く安政元年三月）歿す年七十六、東條琴臺は其の兄なり」とせり死の年月は相違なかりしかなれとも東條琴臺は寛政七年乙卯の生れなるを以て安政元年には六十歳にて萬延元年には六十六歳なり文京の齢を安政元年に七十六歳とするも萬延元年に六十六歳とするも琴臺の兄に當りたる事にあらさること明かなり

扇屋傳四郎

日本橋の魚商にして扇面亭と號す琴臺の弟子ならん毎に越後に於ける琴臺の詩へ江戸の状況を詳細に報知せり細木香以の如き事蹟なきも中々面白き人ならんと思考すこれ以外には知る所なし

落合雙石



有於ニ占ノ字
磯ノ系ハ之よ
めノ宿ハ居
ト磯ヲ之ヤ

治元年 四年ノ誤ト考フ 八十四翁致仕中ニ於テ 丁丑 三十三 ツト書ク所
此ノ幅ヲ 寒村ト題シテ
夢醒縄牀村雪明 不禁寒栗倚方生 鴻爪倩見梅
花落水流閑晩磯 有韓
ト此屏鴻爪集三巻ノ内ヲ刊行シテ書ク 論語統 七之巻
統四語統 ナキ 著ハ也
猥ニ小篆其ノ他ヲ見ルニ 封ヲ献呈候ハ 甚ダ
あつニ先生一生見ざりしに 不思ぎニ 失礼ながら
此等ノ事ニ御座候ハ 此案ナト知ラレ アリ
昭和十月十三日 西宮ニ 三松浩 拝
森林先生 机下

セミヒ末
橋ハ大坂
市ニアリ
某ノ年譜ハ
甚ダ記憶イタ
シマセンガ文久二
二年ト存シ

教ハ
伊沢蘭軒先生ハ事ニ詳シカラン 敬助氏云フ
南涯ハ伊沢ノ一子 私ノ所持スル書冊中ニ蘭軒ノ記事アリ
落合廣貫 字ハ子載 号ハ渡石 称敬助
日向飫肥藩教授 所著有周
易統論語統左伝統国語統及
詩文集七巻 寓楠檀木橋北
私ノ故郷 摂陽灘魚崎村 徳川時代ニハ五百崎ト申シ音誤ヨリ魚崎ト成リシナリトシ 教ヘ歴ニ在リ
ニテ有日向藩儒ニハ 年八十 齢斯レ漫遊ノ終焉
トシ此ノ酒狂家先ニ甘頭ニハ筆跡ハ古人ノ真似

スルデ無ク脱俗一家ノ風アリ筆法ハ学録ナ乞クニ
度因ニテ書ヲ外ニ類ノナキ字法ニハ江戸昌平校ノ教
学者ニハ旅行ノ際ハ両樹ト申物ニ書キ精ナ入レ其レハ
家僕カ肩ニスルデナク扁所ヨリ次ヘヘ送リ届申ハ
老体ニ腰モ不傷杖モナク長刀ナ差ニ使是ナリト
先生ノ謂レシニハ高齢ナレ氏歯痛肩凝等ハ不知ステ
不知ト申ハ先醒ハ圭角無ク温和ナル御仁ハ国
ニハ男子有リ大阪ニ常ニ在セシト聞ハ学派ハ朱子
学ノ実ニ深ク以テ十一歳ニテ大坂デ男子ヲ修メテ依而
以テ十一ト名称セラレたし

書画ハ大阪市ノ西ノ宮藤沢家ニハ必ズ有ルは東京ノ
柳先生ノ世俗ニ密ナル学風デハ無之ハ漢氏儒者トシテ
ハ大家ト尊敬致し
太ハ宣ヲ伏テ字モ乏ク猶ホ漢学ノ私印年次
家ニシノ夜活ニ聞ヘテ字分ナルノ耳
ナリヲリテ
清水　人
藤沢先生

村山大樸

庭聞漫筆 写本 上下二巻

村山淳大樸編

七十二 諸書多言七十二、擧九々成數之多者言之耳、

元二之灾 見于後漢書、一元中次二之戹也、

蔵雑 花也、鎖也、

石印 元末王冕、称煮石山農、始以昌化花乳石刻印、

永楽大典 成祖時王洪等編、

專術綴術　專術量高深遠近、綴術求星辰行步、不可以形察、以算數綴之、

乾設　漢張湯傳、張湯始為小吏、乾沒、風目爍水為乾、江湖沉物為沒、諸脂就消亡、不可為詁也、

評泊　韓致堯詩、白玉堂東遙見後、令人評泊画楊妃、論貶是非人也、

山靜似太古　唐子西醉眠曰、山靜似太古、日長如小年、餘花猶可醉、好鳥不妨眠、世味門常掩、時光簞已便、夢中頻得句、拈筆又忘筌、

敘　東坡祖名序、故作敘、王石寧祖名覽、故作攬、

市井　市必在邑中、有井以便市、

鎖廳　官人應舉、鎖廳而出、

刊書　始隋唐、至五代盛、

兎遁　肥遁也、

忩　起也、

提耳　附耳教也、

中謝　中賀、誠惶誠恐云云、

己卯八月三日閲過　濇

筑井昆陽

筑井昆陽稿本 写本十巻

戊子稿

瑶溪

清籟、秦氏

前田東軒

屋君撰

佐坂携斎

屋仲行

乗子

10 高知堂製

吾白河之地

子直

乘附靜淵

津清、昆陽、直清、筑井氏、子諒、清一号肴山、

文有思

希陶

癸巳稿　天保四年

須藤世德

安川某

山下甲峰、名温

岩崎子負

堀江子德

服部教授

大竹氏勿剪亭

霞城、堀江氏

菊睡、常松氏、乙巳六十三、

前城主越中守源公定信

廣瀬典、蒙齋

甲午稿

鈴木西陵、名俊、字克民、一字希克、二本松人

士光、井口氏、白河人
吉田眠鴎
谷南、矢島氏、立卿
大澤甫
古狂
畫軒
蘭室
洞然、須藤氏
適山
水竹居

池東山
小山利壽、後利器、字子友
丙申稿 天保七年
富田卯敬撰
乘附翁川
澄沈是
乘附保
田村延世
堀江茂材
井口光基

丁酉稿

菅沼慶助

直温

戊戌稿

阿部豊後守、白河

筑井又右衛門、江戸麻布竜土白川屋敷居住

石岡生

田村餘慶

臼倉孟直

並河守拙、称五一、誠所四世孫、仕守山侯

総　呉女総

常松取蔵

己亥稿　天保

子幹、犬谷氏

堀江東堂

主静堂

秦清頼、祖思徳斎、父適斎、弟札君餘、

上田陸舟

玉蓮女史

庚子稿

飄亭

川瀬才助

落合半閑

廣瀬旭荘

辛丑稿

水竹居

福山師

内藤資昌

白水、比原直、

癸卯

吉向堂製

客中佩月、家君退隠、

吉田直静

甲辰稿

吉田脩平

正田宗閑

墨君堂、三春来光院

乙巳稿

比原直

巡検使三宅

長崎奉行田口

常盤子碩、
川勝某
安藤珠邨
酒井重樹
常松義助
庚戌稿 旭荘批
市田村舎、在信濃、所居云拄笏看山處、
風越、篆刻家、飯田人、
惠洲上人
太田達卿、伊勢人、医、名士專、号潤庵、六俣野

10 高知堂製

去夏聘山名氏、明年六月女生、(旭荘云、)
庚戌稿
秋素堂、伊勢人
馬嶋元貞
原居德、清内路村人
坂井虎山間||||下世、
陸舟卿
山田沉
仁里、山下氏、
中山某、東奥菅川人、

片桐春齋、近年亭、左茶庵

辛亥稿

岡麿才藏

山田子重

羽倉可亭、名信、字師人

丸山精村、弟仲甫、精村後居既翠園

須田眠庵

小林柳堂

小川万助

羽生保英

島地其

外松蘭堂

己酉稿 嘉永

片桐淳一郎

穀澄全

北澤子順、商之子、

對画樓、丸山精村儀、

鈴木寵

大曽根櫟、居田島村

川澄培鳳

片桐閑齋
石上某
小谷秋水、神戸文学
廣瀬淡窓
秋園桓
村瀬藤城
頑翁和尚、隠駿河庚申寺、
乘附舎明
櫻村、山田氏
日尾荊山、江戸人

北村芳林、篆刻家、善光寺坪人、
戊申稿
服部天游
大曽根玄瑞
細田
渦村某、好古家、殿島村人
奥田桐園
馬島明眼院
片桐源一
南臺
戸井田研齋、河越儒官

澄照上人、講政寺主、

宇津五輔

丸山潤介

壬子稿

其氏陽、字大嶺、号月下園、江戸人

田村陽陰

水野蕪庵、見山樓

稲原邑正晉左

竹洞

飯嶋秀

秋山惟恭

字仲禮幼名浪江長シテ伊吉ト称ス號ヲ巌山ト云フ又千別舎ト號ス父ヲ相模ト云フ那珂郡猶猶村（現今仲多度郡象郷村ニ属ス）ノ人ニシテ世々猶猶神社ノ祠官タリ幼時琴平ノ牧東渚翁ニ就キテ学ヒ粗和漢ノ学ニ通シ成童ニ至リ備中笠岡村小寺先生ノ門ニ入リ学業大ニ進ミ塾ノ都講タリ惟恭夙ニ国学ヲ修メント欲スルノ志アリ乃チ頼山陽ノ風ヲ慕ヒ竟ニ其門ニ入ル翁甚タ之ヲ愛シテ曰ク「余ハ儒者ニシテ国史ヲ著ス子ハ余ト同癖アリト」称ス其撰スル所ノ日本外史ノ稿本ヲ示シテ曰ク「是レ猶余カ秘スル所ナリ子請フ之ヲ読セヨ」ト惟恭感喜居ル一年家ニ帰リ生徒ニ教授ス生徒大ニ萃マル此時ニ当リテ我国書ヲ読ミ之ヲ解スル者甚タ少シ而シテ学ノ西讃ニ興ルハ惟恭振鐸ノ力ナリ是ヨリ先キ丸亀藩儒西讃府志ヲ編セント欲シ未タ其ノ人ヲ得ス乃チ擢

蒼ク注ス叢桂幕里惟恭ト也ハ惟恭名ハ孝子括猶野十年ニシテ其
印ヲ読ミ傳ヘテ重ネテ及ブ地理人物ヲ刪定シ業ニ志ンテ細大遺サス
積ンテ二十巻ノ多キニ至ル大悉ク讃フ之ヲ蘭陵ハ之ヲ賞シテ待ツ
精撰ノ典ヲ以テシ加フルニ全君平小林好卿ヲ聘シ後ニ溫故神社考帝鏡
蒙求、續新語、溫故小史ヲ讀書ヲ兼ネ惟恭詩ヲ善クシ尤モ和
歌ニ妙ナリ世人許シテ聞ク古今ノ考ナルト云フ文之三年男吉高ヲ喪
ス年廿七村田兄弟ノ後ヲ葬ル配田海氏二男二女ヲ生ム長ヲ栗ト云ヒ
家ヲ嗣ク蚤ク亡ス次ヲ死ス二男七五三ト呼ブ又早世ス二子ハ孝
高臨人皆惟恭ヲ子ヲ取ルナシ以テ三蘇ニ比セラルト云フ時ニ二女共ニ既ニ嫁
セシ後ナレハ終ニ嗣ヲ絶ツ惟恭ノ文ト行ト斯ノ如クニシテ此ニ至ル事豈ニ遇
遇ナラス折天ガ必ス有ルカラ惟恭卯男平瀬擢ンテス其遺
書ニ乃ワ叢桂幕ニ遺ス如ク此書等溫故ノ人ヲシテ称ス惟恭
人ト言ヲ訥ニ之ヲ口ヨリ出スヲ能ハサル如シト雖モ其ノ書ニ讒ヘニ至テハ
言吐清爽論旨明白ニシテ微細ニ有リ總若ハ就クト云フ前ヲ
年ヲ大日本史ニ寄スハ青名ハ惟恭ノ遺稿ニ集ハ其ノ遺序ニ見ヘタリ

備考 墓碑銘并ニ有略註ニ作ハ開場ノ院ニ寫置ス
ハ好ヲ山浦氏ニヨル

惟恭文遺集ハ惟孝 母宗村氏 文化四年丁卯八月朔書ス

巖山秋山君之墓

一日友人入谷德盛來曰西讃有秋山翁者素與僕相善頃僕帰道山矣其孤惟豊椅然嗚呼曰嚮先人之在世也毎願一識梅邨山田子而未有為之先容者今也不幸棄世使梅村表其墓期庶得樹先人于地下矣聞子與梅邨有舊盍為請之其懇私如此幸一言以賜之余聞之愀然淚下嗚呼君生前未曾相識而何其相投之深余雖不文不將之托其安可辭因叙而銘之乃所以誌神契也

君惟恭字仲謙號巖山俗称伊豆又曰惟孝為西讃掃梨神社祠官母岩井氏以文化四年丁卯九月朔生天保四年癸巳罗月代父襲職奉祀誠愛從禰其職兼修治神宮頻為輪奐天保六年乙未十月為俄始許

謁見蓋特恩云君夙耽覽讀書敏捷數行並下遊于備中笠岡從小
寺楠園受國學遂涉群書殊以強記見稱喜賦詩及和歌而尤邃
神道家說本府嘗命纂輯封内地志君亦與有力焉因蒙
賞賚又嘗受賴山陽日本外史始脫稿即從箧入京師請賴氏求借夙夜
匪勤手親謄寫以納諸府學每好寫書筆疾如風雨數紙立成自謂目閲
之不若手寫之易記平生所謄殆汗牛充棟矣其勵精專力大率此類君
爲人質朴不事矯飾樂易不設崖岸善飲温克喜與人談笑相謔及其沒
門人故舊皆會投賻以助墓碣之費嗚呼後是雖其素行孚于人安能遺愛如
此乎哉歿之歲實文久三年癸亥四月十日而春秋五十有七矣娶内海氏生三男二
女長子早夭次子惟興嗣後銘曰

學篤和聲行孚神人死而不死其唯神乎神之所寓其唯文乎
神感有敬文則不湮

元治紀元歲次甲子夏五月

東讃 山田文吉 撰並書

文吉郎
梅卿

謹啓 所書画持仰越 蕪庵翁秘伝
豆墓銘前書 如御覧 如御申越候
表紙之題字 時々御閲覧 千萬奉祈候

大正十年十二月六日

魯山人 村拝

森先生様 侍史

奥村無我

大正十年七月二十六日寫ス　魯山人

奥村重蔵、字ハ無我ト称シ權右衛門トシテ聲ヲ知ラル 後西院天皇ノ萬治元年一四代将軍徳川家綱時代ノ巳ノ人、備前國岡山ニ生ル 曾祖薩摩相市内ナルヲ甚門埋田直家ノ事、備前八浜ノ戦ニ父子皆打死セシコトハ史冊ニ明記セル所也、祖父九兵衛氏ヲ改メテ奥村ト云ヒ播磨暁ノ浦利隆 後ニ備前ニ従ヒシガ後致仕シテ美作ニ行キ父ハ山吉トイヒ鏑偏前暁ノ浦ニ住シ後ニ姫氏ヲ娶リテ二女ヲ生ム 長男ニシテ継嗣男ハ即チ無我ナリ 無我容顔魁偉ニシテ蓬髪窶驚ク少クシテ剣術ヲ好ミ旅舎、夜ハ、素ハ、餘業、諸先生ニ順次師事シテ力ヲ輸スコト数十年、技成就シテ近傍ノ郷中ニ遊ビ、古人常ニ之ヲ師トシ自ラ以為ラク已ニ若クモノ莫シトシタリシ川崎氏ノ家臣ノ田村鬼外ト云フ者江戸ニ来リテ備中ニ遊ヘルニ会シ無我時ニ芸ハ休ノ帰リテ之ヲ聞キ旋ヲ振ヒテ起ツ 而モ甚ダ遅シ 相撃ツ 鬼外竹刀ヲ仰ケテ風ヲ感ジ

其ノ技敵スヘクモアラス真ニ無斯刀ヲ投シテ歸シ遂ニ請フテ之カ弟子ト為リ學フコト一年
ヲ遂ニ根以西遊鍛錬ヲ究研セリ兜外ト號シテ大ニ及ヒ兜外書ニ編ヲ出シテ而ヲ
「吾曰此ヲ讀ミ不必ス悟ルモアラン」ト果シテ其ノ言ノ如シ此等ノ劍士ハ皆其ノ術ヲ繋ヲ
常陸国筑波山東軍寺僧ヨリ出テ国ノ名ヲ東軍流ト云フ無二ハ從ヒテ劍ヲ
學フ其ノ森玲遺長盛ノ號ハ河村部衆利、播州赤穂藩士深野長雄ノ大史
大石良雄及ヒ大石信清、湖白高教其ノ他諸藩士ニ其ノ傳ヘ之ハ無二ハ又嘗
テ頼ム術ヲ名ノ刊越ニ服部ヲ沖野椎平ニ傳ヘ其ノ術秘奥ヲ尽ク
元禄十三年庚辰以来、讃岐ノ事ヲ高松藩ニ於テ新常（以下闕）ニ傳ヘ吸事
致仕シテ家居シ株ニ事ヲ主情ヲ宿ニ在テ享保十年ニ当リテ殁ス年七十五
テ遍ク城西蘭若ニ葬ル現ニ其ノ原ニ墓アリ高松藩士像多ク其ノ遺蹟ヲ

此、無二ハ從ヒテ劍及服部ヲ學ヒ数々錬リ修シ遂ニ之ヲ銘ス嗚呼銘ニ曰
于嗟骨肉将連枝　勤務在更修之
大石良雄劍ヲ學ヒ名ヲ是ニ學フ時ニ粘言書　現今寓ス其ノ性ヲ存ス寫
存ス如シ

起請文前書之事

一、東軍流之其ノ他就流相傳無覚之前師資他言申間敷事
一、免許證立他流別一流立申間敷事
一、免許以後無二極秘太刀見せ申間敷事
右之條々於相背者
梵天帝釈四大天王伊豆箱根三嶋大明神　八幡大菩薩天満

大自在天神摩利支尊天愛宕山[illegible]大小神祇[illegible]
蒙者也仍起請文如件
之孫[illegible]
大石内蔵助良雄（華押）
奥[illegible]左衛門殿

石居兼松誠字成言小傳

先考名誠、字成言、後以字行、通稱三郎、號石居、舊津輕藩主信順公參政兼松久庸通稱圖書號鷗山、君第三子、母同藩醫服部某之女、名伊登、後削髮謂本理尼、溫雅有才學、先考天資聰明、傑邁有氣節、仕乎藩主政德公、爲督學、兼侍講、屢上書言事、有所獻替云、頗學宏才、講學著書老而不倦、所著有藩祖畧記、津輕前譜、討南記畧、討北記畧、閑筆話柄等、先考之名頗顯於都下、嘗有長篇之詩賦所經歷之梗概矣、記以爲證左、

夢醒

維時丁卯周正天晩酌一醉忽就眠眠熟夜
長酒力短酒醒夢醒夜似年斷夢難續
頻展轉倦来感慨自有牽此際往事涌胸肌
試綴腹藁聊成篇憶起雙親在堂日以子季
子特加憐且有姑姉撫字至此恩無由報黄
泉又憶弱冠志于學進入聖林自着鞭着鞭
不進駑駘質頼多益友相周旋又憶扳擢叨
辱辟謾將謗劣陪經筵或侍世子獻句讀
或聚生徒談聖賢又憶墨夷始来舶謬選
妄為隊長員投巻抛筆事韜畧欲以躯為家
國捐又憶乙卯地大震藩邸殿廡半倒顛時為
監察許入内急跋顛屋候君邉又憶世子即世
後継嗣未定物議傳不顧身分有所建因冐
譴責坐北遷又憶北遷去燕土携妻提兒後與
前朝發暮宿驛程遠謝花蹈雪山又川豈圖
再辟入洋水還共儒林共並肩讀書為儒派弟
纇砣々至今亦因縁摟指五十年来事其間曲
折幾萬千君不見邯鄲一夢五十載枕上
自有別坤乾

先考江戸人、後遷居于藩地青森弘前、嘗曰、予勉學至
于老、莫有一過人者矣、唯以為世儒或不明于
我國字學、是猶学者之不成人也、又或暗乎家倫、
喪服稱謂之學、又解官府文者少矣、是等自以為
有所少得焉、　先考至于病篤易其簀之日、
從容賦五言絶句及和歌各一首而逝矣、明治
十年十二月十二日、壽六十有八、其詩曰、
今日吾知免、亦将騎鶴遊、上帝責殊
命、使爾永相休、　其歌曰、
よしゝ浪のたち騒きつるよとうみの岸をと離れし
て私に記出し

旹大正五年丙辰暮春日

男　兼松良字止所　撰

先妣、屋代氏、名眞、舊酒井大學頭藩士、屋代某之女、
配于先考石居翁、生三男二女、先于翁而殁矣、
良字止所、號厚朴軒、舊津輕藩士、石居兼松誠成
言翁之長子、配于同藩士梨田某之女、名千枝、生二男
一女而殁矣、良嘗為青森縣師範學校教諭、多
年焉、明治三十九年四月辭職退隠、方今寓居于
東葛飾郡市川街、年七十有五、

兼松成器、舊津輕藩士、厚朴軒、艮、長男、配ニ舊米澤藩士山田某之女、名春枝、生ニ三男一女、一男ヲ方今成器為リ下野砲兵第十五聯隊、砲兵大尉、兼聯隊副官、上寓ニ居ス乎東葛飾郡市川街ニ、

青先生函丈

津山碧山

○月朔、

神田緑太郎 拝

別紙件ハ既ニ差之候得共ハ猶此者来リ陳、
其以下内ノ件津山先生之人様ヘ伺ヒ候夫、
以度ク

一明治六年十一月廿六日　伊守氏 二十四年ニテ津山
碧山ヘ嫁セリ

付記 碧山師ハ當時三十四歳ナリト

津山碧山先生妻ハ同ク伊藤氏ヨリ入嫁
ス一女アリ長ヲ直次郎トイフ養子ニス
直次郎ハ大正五年十二月十五日死去ス長男
男ハ京師ニ於テ工藝学校図案科卒業
今大坂住友ニ勤務中ハ今ハ東京ニ在
初トアリ伊保氏ヘ復寫セリ

伊作家ヨリ後妻トシテ入嫁ス子ナシ

一 良子様ハ十年バカリ以前ノ事カト記臆セラレシモ不慥ナ

曽祖父ノ目ナラバ慥ナラン 其内陣山氏ヨ

良子様ヘ文通ノ上慥ハ御申上トノ事

左ノ外

外ニ 未亡人ノ談片（少シ不慥ラシキモ）

㒵 —— 相覧ノ親覧

甫 —— 𩍩

親覧 ┬ 市蔵（モト平太トイヒシカ（平太ノ息男某）ト称名セレトカ アザアリシカ
　　 │　同腹
　　 ├ イ林（慎宗ノ弟子 臂曲リト 十細工妙ナリト 手ナリト
　　 └ 平三（後妻出（伊作氏ノ媒介トカ
　　 　 蔵

吉屋御宗里ノ坪ノ藤ヶ苑 又何蔵人ノ名 クヱノ孫中モ

〇親覧ノ妹トカニ タツキ ト申ス盲女アリテ琴ノ名手ナリト

ノミ白記モ七男親ハ伊作家ノ大恩ヲ受リ 伊作家ノ方ヘハ足ナ

向ケ寝ス可カラズ 子孫モヘシト ヨリノ 遺言ヲ出命セリト

〔佐藤製〕

林氏ノ事ハ不慥ナレバ熟考シテ成祈ニ

伊作家ヨリ後妻トシテ入嫁ス子ナシ

一 良子様ハ十年(ハカリ)位カト記憶セラルヽモ不憶ナリ

曽祖父ノ名ナラバ憶ナラシ　其内津山氏ヨリ

良子様ヘ文通ノ上憶ヘハ吾申上ノ筈

存外

外ニ

未亡人ノ談片（少ク不憶ラレキモ）

相覧ノ親覧

市花（モト平太トイヒシカ（平太ノ自署）ト称名セシトカ　アザアリシカ）

伊世

同腹

○親覧ノ妹トカニ　タツ利

○津山碧山翁

義道字子行号敬ノ翁

論語　行義以達其道

安政丁巳子四月吉旦

安積信 考

法諡　無疑斎義道碧山居士

殁年月日ハ満ハ未亡人　五十二

一寸不憶ヘラレザリシ

龍山 東津村 真宗

観音寺

○石川貞白翁

明治十八年三月五日歿　年壽七十三之

福山寺町法華宗

光政寺

○

三二三号　大坂殿

多記　中央ノ巴、　信植

○棠軒モ蘭法ノ医漢医ノ衰ヘ慨キ父祖ノ傳業トテ之ヲ遂ヘ

廃医セん　福山病院ヲ地方医師ヲ集回文業兵隊ノ

下ヘ近江廃業ヲ付出席セズノ旨ノ書セラ之　廃医ヲ教医ヲ

七十三生佐ニ

當兄ニ、

於いまで人読

於て、

於一切大行業ニ絶ヲ責ヘリト

○石川貞白府

明治十八年三月五日歿　有志者立之

福山寺所　法弟子

光政寺

○

三二三号　大坂殿

多記　中央ノ辺、　諸植

上田總父祖

上田一道

父儀兵衛致仕居北山下、生一道、母歿、従父移
山崎、父亦歿、一道時年二十二、寛政元年十
一月也、

文政十二年十二月致仕、時年六十一、
天保元年庚寅二月十三日発越前、往筑後、筑前、
豊前、長門、航海抵大阪中島藩邸、入京師、
賍来徳太郎、中島格吉、廣岡崎太郎、往大和、
紀伊、伊賀、遠江、相模、入江戸、経信濃、美濃、
近江、播磨、西帰、二年辛卯五月十一日帰
郷、

宮内省

遊天草邪、又遊大水、
三、不見俗、柔佞而能媚、其黠者縦姦、愚者
詐、此可悪、又為因憎一国有二俗也、其一則
有寡而信者、其一則邪佞也、一国二俗、化之不
至、可見之、折居于土者之善也、

都のつと

日録
吉永雅兵

上田一徳、名近藤、又森　字伯善、號清濱、木下韡村門人
號蜀園、胖仙、半田、戊巳亭
元治元年七月十八日主命出郷、
蜀の病客ゟ便あり
雲に心す國札ちよ竹わきつてり再ひてうよの五たに
ちはなる游
慶応元年丙寅　十一月朔休見、
慶応元旬乙丑
歌ノ師櫨園へ
三年丁卯
十二月廿二日示竹添慎所詩アリ
明治元年戊辰
添見云々

日大本　日大本　最上本

二年己巳

三年庚午

竹添慎所赴伊谷為村学究、

懐岡松甕谷居

四年辛未

五年壬申

六年癸酉

彦児亡く

八月乙亥

九月丙子

西児亡く

十二月十二日晩、稲帯男女二児内人与媳帰、施

名行護之

道一

徳一

源兵衛

彦

女

穂

有感

平井俊東堂

真箇用人如用物。雖然散木可施工。請看
捐棄秋涼扇。猶有爐邊煽火功。
石同人集二編卷上

平井東堂
宮內省

絲井強

奉壽

西湖上人六十

壽星高掛呈壽祥。壽滿西湖壽佛樂。壽每
任家年至百。壽兄登山敢速怖。壽追大多世
界容。壽酒六十初敬觴。壽詩叙功欲併壽。
壽母壽兄共但席

法外庠知
糸井強再拜

三年庚辰

伴直方

「宝八嶋」梶の葉」標上ニ

宝嶋ハ西麻雅アリ 藤原友淳所著」

伴氏図記

巻首ニ

又梶の葉ノ巻首ニ

梶の葉 跋集之 私園短歌

序「宝永三の秋文月薮の日 武陵游士 蛙鳴子

「右一巻吉田織の本をもてうつしぬ文政、辰のとし葉月

廿一日 伴麻祢直方

金花堂
倉持氏印

10
高知堂製

大河原文左衛門

大河原文左衛門、飯能人、著妙妙奇談、見于無音堂雜筆、

宮内省

林鶴竹

蒔絵家なり初め蒔絵を業とす中ごろ本
所外手町に住す或は女髪結なりし 鶴竹ハ俳
諧をも善くし 三世大江丸と称す 如何に実
の鞘師にて或る赤まんくをなせり鶴竹入
獄数度最後には三年獄にありき晩年
本所押上村本尾個に住しなりしに脚気
を患へ衝心して死す田甫の法華宗コウ
りう寺に葬る遺稿ハ南葵文庫にあり
(武田信賢話)

10 へ加製

赤沼五八郎

基蘇家なり江戸何とかの子とか水産研究所出身なり後脳病院に死す（武田信勝話）

鈴木藤吉郎異聞

〇鈴木藤吉郎 生国下総
墓中根岸千手院ニ鈴木氏墓六基
アリテ其一ツ此人トス

妻越川氏勢喜
妾セイ
明治十三年頃歿

養子
松之助 本越川氏、継藤吉郎後、既而改姓ニ
穂積、後復越川

松之助 養子、実藤吉郎庶子、夭

松之助 セイ出、明治十三年頃夭

三郎 改卓人、又改一、学于佐夫聚、住常陸太田町、指徳、大正元年歿于太田町、年五十七、亦セイ出、

麟太郎 東京住

鎌次郎 福嶋住

九騶 法科大学生、駒込上富士前町五十八湯元方

高知堂製

キン四郎 浅草住、現住越川氏

某女 藤吉郎妹、此人有子女数人、一女存至于数年前、

ろく 若名氏、近歿

右大正六年九月二十六日九萬内語

悠然見南山

我是研卿寛太寫 自慵情趣出天真 如斯酒徳誰解識 只合黄金鑄伯倫

鈔酒詩代柬賦 杏村漁人

春溪風雨

甲子室三前一日寫於塵遠草堂

杏白漁人

高橋杏村

守成堂記

石井郡造

小中里正石井長光規其宅後新造堂若干楹以爲延客處面勢已宜材木亦良其西北二方臨近溪而瞻遠山四時之景奇態異狀得座收之搨旁焉堂旣成後二年予遊下野其子恒方從予遊須使恒方請予亭名并以記予名曰守成且告之曰嗚呼恒方語曰肇業難守成亦不易夫父基之子守之而易祖開之孫繼之稍不易何則其子及創業辛苦之日而孫則或不知故也况於玄云曾云之遠乎孟嘗君曰欲以遺所不知何人此言可以嗟可以嘆然而不學無

十二行 侖 製

賴子弟有親見其父祖艱苦猶不能守者是又最可憾惜矣且夫拮据搆堂其所欲延招果何人也将君子乎将野人乎将浮藝空文以自誇詡者乎将依據經傳行己有方者乎昔漢陳平門多長者車則有人以卜後来富貴焉宋梅氏與客談其妻從扉後聽之諫去棄其不可者世傳称其賢嫩焉語曰以文會友又曰以友浦仁耕種之餘里務之暇招集師友於此而講習經傳以自激則是亦守成一助而且父長光造此堂之意乎哉不然宅後閑室可羙狌則是晏安之所生豈父祖遺子孫之義乎哉

水戸弘道館教授畠山立識

石井翁碑銘

石黒忠悳篆額

翁諱恒方字之固幼字廣吉後改郡三郎守成堂居中並其号下野国安蘇郡旧小中村人考称郡造妣室岡氏家世里正逮考時爲関東八州吏所轄田沼街外十数村大總代許称姓佩刀郷人以為栄焉翁意猶未満欲立身以顕父母會福山藩赤尾鷺洲来寓郷里翁就学斬然見頭角後遊江戸師事大槻盤渓與諸俊髦交閲水藩多士去赴水戸従弘道館教授畠山某究和漢学當是時幕府失政洋人跋扈雄藩跳梁不能制焉如水藩勤王翼覇朋黨相軋内訌外

患人心洶々天下将大亂翁有所感直帰郷日夕繙
巻以待時既而有京師之變伏見之戦延至奥羽函
館之征討遂王政復古群才登庸於是翁之友朋相
率解褐翁亦彈冠欲出以二親既老侍養無人故絶
仕途明治五年廃藩置縣翁為副区長若學区取締
班准判任十一年七月辞職後被選縣會議員未幾
又辞之蓋鞅掌里務非其志也然黽勉從事未嘗曠
廃其為人可想已宜矣区民多之縣廳賞之屢賚金
三十三年十二月十日病歿距生天保八年正月七
日享壽六十四嗣子録郎奉職軍醫在于台灣聞訃

遽歸越明年一月廿七日葬先隴之次釋謚曰守成
院淨照寛裕居中大居士翁資性沈毅不猥言笑恭
儉持已蔵書數千巻借覧立身者頗多平素嗜書畫
好點茶風騒之士塡門罷職後不復談政事獨至女
子教育則專致意云配木塚氏擧三男四女長琢郎
早世次四郎冒坂原氏次録郎承後銘曰
青雲屈志養雙親丹心報國待子孫寧馨果得嗣子
頭進爲軍醫在台灣浩波渺渺與雲連縞地有術搭
汽船一朝會葬萬里天天賜爾類孝道全

明治三十五年四月

本國　森　保定撰文

○和氣明親
　├ 半井明英　鈴林、關帝ノ師
　│　鐵山四代
　├ 瑞笑　驢庵、通仙院 ── 瑞桂　驢庵
　└ 驢庵　成忠 ── 内匠頭寛時
　　　寛文ノ比

通仙院
　└ 内匠頭成庸
　　　驢庵

出雲守成高
　├ 大炊頭成高
　├ 武右大掾
　└ 大和守成美

寶暦
修理大夫清雅　小川町 ── 半井出雲守慶明　寶暦　小川町
安政ノ比

卜仙 ── 策庵 法眼、奥イレ 矢ノ倉

曲直瀬氏

○曲直瀬養安院 有故佯狂投井而死 実薬撰綴作冥名瀬養安院、

シヤケン 保識之 ── 愛 維新後為官吏、著英和辞書、保識之、

高階経元

家祖経宣ノ父ハ経元ト称セリ
青蓮院宮坊官鳥居小路家ヨリ出タル人
ニテ同家ノ姓高階ヲ名字トナシ業ヲ醫ニ轉セリ
俗称ハ東逸 字ハ士春
錦小路修理大夫門人トシテ寛政九年二月九日
天脈拝診 仰付ラル

同月十日法橋ニ叙セラル
同月十三日参内拝診
同月十二日法眼ニ叙セラル
文化九年十一月六日病歿　年六十三
天保七年十月十九日二十五回忌ニ中ニ法印ニ
贈叙セラレ求古院ノ号ヲ賜ハル（奉行萬里
小路正房）

高階経本記

唖科柴田氏

直教　雅河
直儀
貿

直為　字子温、号東白軒、元禄　文化六歿　林衛銘

直貿　字英卿又可人　元仙竹隠　安永六年歿　桂壽銘

元徳
某
芸庵　本叔丁
女　芸道壽

正雄　三十而逝　字君偉　号海南　元春

寛政三年歿　大椒清山宗銘　十月九日

直道早世

直温早世

直菴

元齊

宅一 桜井氏

一徳

忠心 飯塚氏

正美 字子済 元美、後元春

元安 分家

玄川 坂井氏

元春

元良

養子 元春 実玄川子

常庵 ― 養子 玄川

陽庵

陽庵 後忠平

銘太

久志本氏

〇久志本隼人 ―― 主膳 濱村門人、与保同宅、早世、

久志本在京、寛政比人、見于寒棨璞綴、多蔵書、

自述

辻元崧

懸車乞骨尋常事。百出致身吾所期。欲与梅花立氷雪。鐵肝吾自耐支持。

右同人集二編巻上

今茲乙卯余年七十九新正生齯乃賦 安政乙卯

同人

邇々初日満天霞。梅柳渡江迎歳華。別有春風仙気至。耳毛添緑齯生芽。

辻元崧

註、曩時花亭岡本翁年寄ニ而、右者觀候、
右同人集三卿上

照國公文書

多紀樂眞院ニ與フル書嘉永五年五月廿九日

(按)多紀樂眞院名ハ元堅幕府ノ奥醫師タリ醫術ニ精ク博學ヲ以テ稱セラルル公之ト親善ナリ篤君入輿ノ事ヲ周旋セシム

(按)と有るは島津家にて此の書を編し[illegible]人の按なり

多紀茝庭

一筆致拜啓候大暑之候御座候處愈御清福被成御勤仕奉恐壽候扨先比は以宗膽獻上藥之義も被御下忝奉存之折持參可仕候間其節は宜敷奉希候檳榔子之事此間承候へば中山へは自然生澤山之由申ものの有之候實之

川崎中學校作業用紙

且梶原性全と申仁之著述萬安方と申書其御地に御座候や所持之品闕本に相成候間若若御在合も候はヽ寫讀度申上試候

（按）此ノ書尋常音問ニ過ギズ然レ圧書中檳榔子ノ事萬安方ノ事皆以テ公ノ心ヲ庶物ニ留ムルヲ見ルヘシ

多紀樂眞院に答フル書　嘉永六年九月廿九日

（按）此書ハ樂眞院ノ書信ニ答ヘ篤君東上ノ事ヲ報ジ併テ爾後ノ消息ヲ聞カンコトヲ望ミ序ニ藥種栽培

川越中學校作成用紙

此の欄外の文も原書のまゝをうつしゆかり
篤君と申すは天祥院様の事なれ
人名字を異にしたる故とかきたるか

例義ハ篤君一件ヲ云フ姉殿ハ大奥老女姉小路ナリ

承候へば其儘之様子故彌有之候はゝ實差出候様申遣
候間其外可申上候素人之申事故不足ニ御座候扨例之
御義も参府之上可申上候其うち宜敷御勘考可被下候
此程姉殿よりも暑中御尋被下忝御都合宜敷と御序に
御傳聲奉希候別段申上候義も無之候得共暑中御見舞
可申述如斯に御座候恐々頓首

五月廿九日　　　薩摩守

樂眞院様

猶猶御自愛専一奉存候此品麁末ニ候得共致しん上候

且梶原性全と申仁之著述萬安方と申書其御地に御座
候や所持之品闕本に相成候間若若御在合も候はゝ寫
讀度申上試候

（按）此ノ書尋常音問ニ過ギズ然レ𪜈書中檳榔子ノ事
萬安方ノ事皆以テ公ノ心ヲ庶物ニ留ムルヲ見ルヘ
シ

多紀樂眞院に答フル書嘉永六年九月廿九日

（按）此書ハ樂眞院ノ書信ニ答ヘ篤君東上ノ事ヲ報ジ
併テ爾後ノ消息ヲ聞カンコトヲ望ミ序ニ藥種栽培

例之義ハ篤君事ヲ云フ篤君春廿一日ヲ以テ發途東上ス
美濃ハ筑前黑田齋溥辰ハ阿部閣老ナリ

ノ事ニ言及セリ
八月十二日之尊書辱致拜見候其後愈御安榮恐壽之至
奉存候然者被仰下候趣委細致承知候
一例之義云々致承知候過日申上候通發足爲仕候此上運
次第と奉存候乍然八月中旬美能辰に參承候得共未た
何分難申候參府者早き方宜敷被申候由實に六ヶ數事
に候はヽ早く々とも被申間敷やと存候様子相知候はヽ
早々致承知度候
一「ヲロシヤ」未た滯船之由御返事無之内は致歸帆間敷と

の風説に御座候其後如何之御評決に候哉不存何分不
容易事に候
一其後御手當等被仰出候哉此度之所置に而天下之安危
眼前に可相分奉存候
一唐國其後不相分乍然中中可治光景無之由に御座候當
秋渡唐之琉人甚恐怖之由ニ承候唐藥差支之事と存候
一野田源三郎より段々藥草致到來候其外草菓厚朴者土
地相應と存候相思子木棉等中中寒氣難凌哉と存申候
外之手筋より丁子生木入手に相成候是又寒氣之節如

何と存申候當年者茘枝龍眼實結不申昨年之寒氣に障
り候と相見得申候先者貴答迄艸々如斯御座候恐々謹
言

九月廿九日　　　薩摩守

樂眞院様

猶々御自愛專一奉存候御別紙御退隱之尊慮之由未た
御壯健之義夫には不及と者存候得共風月之御樂〻是
又御尤之義奉存候乍然小子方は是迄通に相願申候御
退隱之義扠扠御浦山しき事に御座候先は早々頓首

多紀樂眞院ニ答フル書　安政元年正月廿九日

(按)此書ハ樂眞院ノ來書ニ答フルナリ例ノ御義トハ
篤君一件ヲ云フナリ

極月廿九日之尊書致拜見候愈御安康奉恐壽候小子に
も二十一日發足道中無滞致通行候儀之事にて大取込
罷在候道中に相成却て閑暇に相成申候内藤之事御承
知之由何卒程能奉希候

一小子早參府の儀異船之事に付云云と御考之由恐入存
候何の譯か頓と不相分心配に存候異船之事に候而は

中ニ愚存申上候程之儀も無之當惑之事に御座候若例之御儀少ミ色めき候事に而ハ御座候得ハ難有儀に候何分様子相分兼候間少々に而も御様子御さくり出来候ハヽ極内に而一刻も早く致承知度此段奉希候彌之儀不相分候とも様子早く御しらせ奉願候

一魯人蝦夷地相望候義實に不容易儀と奉存候虚實如何ニ候哉松前家来打殺され候やに承り候様子伺度彌々に候得者御國體に相響残念至極之義と奉存候異人之處置中々以て油断相成不申候

一琉球へも此間亞船参り近々江戸へ参候段申来候間御届も申上候處に昨今承候得者浦賀へ参候様子に承申候此度之御所置は實に一大事之御事と奉存候魯船通之御返事に而可罷歸儀如何と奉存候参府之頃迄には相濟居候様祈居申候様子御しらせ可被下候先は用事可申上如斯御座候大亂筆御仁免可被下恐々謹言

正月廿九日

筑後瀨高に而認む

薩摩守

樂真院様

川邊中學校作文用紙

猶々御自愛專一奉存候以上

今二月四日下之關渡海吉田へ著致候以上

漢方一萬方

漢方五千方

水戸光侯ニ與フル書　嘉永二年五月廿二日

薄書之節御座候處御機嫌克被為入恐悦奉存候然者一萬方御寫被仰付候由寛々御留置ニ而宜敷御座候跡五千方ハ多紀樂眞院ニ御座候由に近比歸り候間奉申上候此品甚た麁末に御座候得共國元に而製造[侯]に申付候鮮に御座候間御側迄差上候松平越前守事毎々於殿中出合ヒ仕候餘程志ヽ御座様に奉存候先者御機嫌伺奉申上度如斯御座候恐惶頓首

五月廿二日

川邊中學校作文用紙

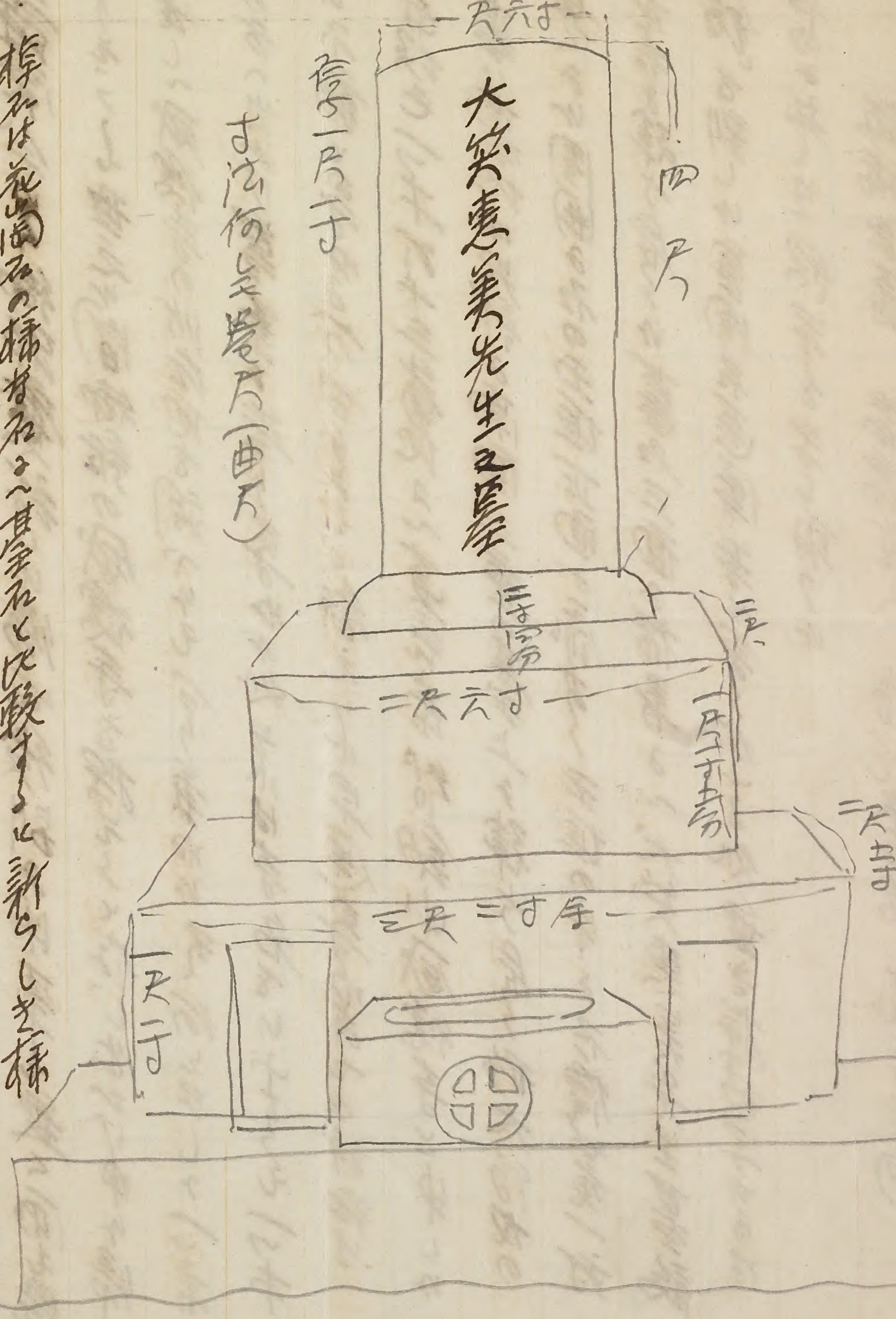
謹啓陳ハ今日ハ御邪魔致しけ歸宅後別ニ用事も無く雨も降
りたつても無之に留御話の威徳寺を探さうと存じ出かけ申け帰
宅して威徳寺の所在地を詢べけも分り兼ねけ先へ何と存じて一ツ木
の方へ出かけ警察ニ参り尋ねけ処それは寺名ハわからぬも一ツ木
の不動と尋ねる方分りよしと教えられ早速尋ねあてけ所在は
赤坂區一ツ木町十三番地ニて真言宗智積山威徳寺と申しけ
墓は墓地中央部ニ南面三重の基壇上ニ建ち居り形大約左の
如くニけ周囲ニ石の玉垣正面ニ二個あり玉垣の中ニ石燈籠一対
花立ニ建ち居りけ墓石三面ニ楷書ニて大矢恵美先生墓誌
銘を刻しけ真固な送傳等を寫り加へる処無き様故写すのは
やめニ致し且銘等を写し取りけ

森林雄様　誌誌拝人　龍蛇[illegible]　[illegible]

恵美大矢墓

川邊中學校備[illegible]用紙

棹石は花崗石の様なる石にて其台石と比較すれは新らしき様見受けられ候



藝無君子　孝悌備尊　大光丕遂　終殉國恩
臣節所遂　天意弗存　東都肆石　俯内顯榮
生榮死恩　先加九京　國華徳長　悠遠悠芳

文政八年乙酉春三月
　前亀井昱謹撰　安藝隊帥澤宜喬書
因幡支封従五位下弾正松平定常題額
　孝子恵美良秀再建

題額の筆者は冠山公なり　事実文編第三冊一二三頁にあるは
廣島に建てたる碑銘には和尚の語に親族は神奈川縣に住し
時々参拝に来るが其の人の語に後裔は廣島に立派に存して居る
に何等の附属も無し来り二三回書面を出したるも返事さへ
無しとの事なり

傳染病研究所

右不取敢所見御紀念迄 申上候敬具

大正七年戊午 十月十三日夕刻

潤拝

兄上様

（杉田屋製）